

「お姉様、はっきりとお断りになった方がよろしいと思います」

「わたしもそう思っているんだけど、彼はすぐ早瀬由美さんに話を移すので、ついつい拒否し難くなってしまって」

賢が漸くその話に乗ってきた。祐子は嬉しいような歯痒いような妙な感覚を覚えた。

「その豪同さん、早瀬由美さんについて何か知っているのか？」

「詳しいことは知らないようだけど、研究会のメンバーからの又聞きで、早瀬由美さんの習慣だとか癖だとかを話してくれたわ。でも、もう種も尽きたようだけど」

「祐子、次の電話ではっきり断った方がいい。いつまでもはっきりさせないのは祐子らしくないぞ。豪同さんにも失礼だろう」

「分かったわ。あなたの言う通りにするわ」

「ところで、降霊会の方にはコンタクトを取ってみた？」

「わたし一人じゃ怖いし、あなたが「気を付けろ」って言うから降霊会は訪問しなかったけど、会の人から電話があったわ。以前電話を掛けてきた人よ。一度会に参加してみないかって。わたしはやんわり断ったわ。でも、メンバーを紹介したいって言うので「一寸だけなら」と思って出掛けてみたの。昼間だった所為か、想像していたほど陰湿な感じのする所ではなかったわ。でも、物音一つしない無響室のような部屋だった。大きさは20畳くらいかしら。わたしはメンバーが取り囲んでいる丸いテーブルの周りの空いている椅子に座るように言われたの。メンバーは7人で、意外にも一人を除いて皆若い人ばかりだった。その中の50歳前後の女性が会のリーダーのようだったわ。女性は3人居たわ。そうリーダー以外にね、3人。わたしに電話を掛けて来た人はリーダーの補佐をしている人で、35歳ほどの細身で少し鋭い目をした人だったわ。わたしが挨拶すると、一人一人自己紹介をしてくれたの。早瀬由美さんについて詳しい話をしてくれたわ。彼女、ここで集団瞑想や幽体離脱の演習をやっていたようなの。リーダーの方の言うには、早瀬由美さんが一番トランス状態に入り易かったって。早瀬由美さんは凄かったようで、身体から抜け出さずずっと遠くまで行って来ることができたって。日本国

内ならどこでも、いいえ、一度などアメリカにも行って来たことがあるらしいのよ。リーダーがこれから幽体離脱の実演をするから、見学しているようにと言ったの。その人たちの中の一人が実演をしてくれるようだったわ。部屋の隅に病院用のベッドが置いてあって、彼女はその上に横になったの。誰も合図をした訳ではなかったけど、その女性の身体がベッドに吸い付いたようになったわ。そうね、まるで死んでしまったようになったの。誰も一言も話さなかった。彼女以外の人はリーダーもみんな瞑目していたわ。わたしはどうなるものかと思ってじっと見守っていたの。そのままの状態でも15分ほどじっとしていたの。誰も動かなかったわ。その内、リーダーが目を開けて「戻りましょう」と言ったの。そしたら、みんな瞑目を解いたわ。そしてベッドの上に横になっていた女性も目を開けたの。わたしはベッドの上の女性だけが幽体離脱したのだと思っていたら、全員がしていたようなの。ベッドに寝ころんだ女性は、あの体勢じゃないと幽体離脱できないとのことだったわ。みんな外の状態を話し合っ確認していた。それから、リーダーがわたしの方を見て言ったの「今、全員幽体離脱をしたのよ。初めわたしたちは天井の上について、自分たちのこと、そう、あなたのことにも上から見つめていたの。それから少し外に出て、周りの景色を見て来たわ。駅からここに来る途中に公園があったでしょう。今あそこの公園で幼稚園の子供達が遊んでいるわ。パンダのアプリケの付いたピンク色の上着を着た保育師さんが付き添っているわ。まだ暫くいそうだったから帰りに確認してご覧なさい。ところで、あなたもこの会にお入りになるのかしら？あなたからは金色のオーラが出ているのよ。珍しいわ」って言ったの。でも、幽体離脱をするととても疲れるようなの。しかも、その間にあまり大きな音を立てると、身体に戻れなくなったり、生命に危険が及ぶこともあるようなの。わたしも音を立てないように注意されたわ。わたしはお礼を言って「入会するかどうか、少し検討させてください」と言って失礼したの。帰りにさっき言われた公園の近くを通ると、リーダーが言った通りピンク色の上着を着た保育士さんが引率した幼稚園児の一団が居たわ。幽体離脱って本当にあるんだって分かったわ」

「祐子は幽体離脱の体験をしてみたいか？」

「ううん、今は普通の状態の方がいいわ。だって混乱しちゃうでしょ。ねえ、わたしって金色のオーラが出ているのかしら？」

「出ている時と、出ない時があるよ。普通は大体出ているな。時々落ち込んでいるような時は見えないけど」

「金色って、何かいいことがあるのかしら？」

「神智学のリード・ピーターという人が分類したオーラの色で言うと、慈悲の色ということになるね」

「わたしは、慈悲なんて考えたこともないわ」

「お姉様はとっても暖かい方です。人を包むような暖かさがあります。それが慈悲なのではないでしょうか？」

「うん、俺も祐子にはそれがあると思う。祐子と一緒に居るとそれだけで喜びが湧いてくる」

「賢さん、わたくしはどうですか？わたくしと一緒にいらっしゃるときはどうですか？」

亜希子が急に賢に問い詰めるように聞いた。

「亜希子と一緒に居るときは、自分が透明になったような感じがする。清められるような。亜希子には純白なオーラが出ているよ」

「喜びの心は起きてきませんか？」

祐子が笑いながら言った。

「亜希子さん、あなたは純粋なのよ。あなたと一緒に居るととっても気持ちがいいのよ。自分自身を取り戻せたように感じるわ」

祐子と亜希子は賢のことを口にしなかったが、賢には凄い勢いで引き寄せられるような、自分自身を全て託したくなるような吸引力に似た力を感じていた。朝起きて直ぐにここに来たのも賢への愛おしさ以上に、その吸引力に引かれたからに他ならなかった。しかし賢のオーラなどというものは意識したことも感じたことも無かった。

「ところで早瀬由美さんはよく幽体離脱をしていたということなんだな。そうか・・・早瀬由美さんの状態が分かって来たな。俺は明後日もう一度浄蓮の滝に行つて来るよ」

祐子が言った。

「わたしも一緒に行くわ」

亜希子も言った。

「わたくしも連れて行ってください」

賢は二人に対し、今回は一人で行くと言った。幽界が絡んでいるから、二人を連れて行くのは危険だと言った。賢が危険性を感じていたのは確かだが、それよりむしろ早瀬由美に対しては一人でアプローチするべきだと言う感覚が強く働いていた。ふたり、特に祐子は納得がいかなかったが、賢の強い意志に負けて止むを得ず了解した。早瀬由美についての話し合いを終えると、3人は青森のことを話し合うことにした。祐子が10時のSTSチャンネルのニュースフォーカスという番組で青森の事件の特集が組まれていると言った。その番組を見てから話し合うことになった。番組開始までにまだ30分近く時間があつた。祐子が「食料が無いので、少し買い出しをして来る」と言った。亜希子は「わたくしに行かせてください」と言った。自分が行くべきだと感じたのだった。亜希子が賢から部屋の鍵を受け取って出て行くと、少しして祐子が賢の隣に移ってきて賢の右手を取りながら耳元で囁いた。

「あなた、とても寂しかったわ」

祐子は美しく輝いていた。賢は祐子を抱きしめて口づけをした。ふたりは暫く相手の唇を求め合っていたが、次第に高まってくる感情を抑えて互いに身を離した。ふたりともそれ以上続けると自分の身体の動きを押しえられなくなることを知り尽くしている。

「祐子、我慢しよう。今は失踪事件に意識を向けていよう」

「ええ・・・そうね。分かったわ。・・・それであなた、早瀬由美さんのことどうするつもりなの？ どうしてもう一度浄蓮の滝に行くの？」

賢は祐子の差し延べている両手の甲をそっと握りながら言った。

「早瀬由美さんの意識はまだあの浄蓮の滝辺りに縛り付けられているような気がするんだ。原因はよく分からないけどな。あそこで由美さんの意識を解放できるかどうか、挑戦してみようと思うんだ。ただ、今回の幽体離脱の話を知ると、彼女の意識はまだ幽界と現実、そして別次元

との間を漂っているように思えるから、それを一方向に向けられるかトライしてみようと思うんだ。今回は一人でやった方がうまくゆくような気がする。それに滝壺付近で幽界に近付くのは危険が伴うから一人で行こうと思うんだ」

「分かったわ。でも気を付けてね。わたしにできることがあったら何でも言ってね」

「ありがとう。祐子、昨日藤代肇さんにプロジェクトのメンバーに入れて欲しいって言ってたな。結構難しいプロジェクトだぞ」

「ええ、大体話の雰囲気分かるわ。大事なことは、あなたと一緒に仕事をしたいということよ。それだけよ」

「おれのアシスタントになるか？」

「えっ、本当？そんなことできるの？」

「分からないけど、藤代肇さんに頼んでみるよ」

「嬉しい」

祐子はいきなり賢の首に抱きついた。賢が祐子の頭をそっと叩いて祐子を引き離したとき、亜希子が入り口から入って来た。両手にビニール袋を下げている。一旦居間に入って来て、

「ただ今戻りました。こんなに一杯買って来てしまいました」

と言った。

「ご苦労様、重かったろう。腕は大丈夫か？」

「はい、重かったですが、大丈夫です」

祐子が賢の隣に座っているのを見て、少し逡巡したが、亜希子は二つの大きなビニール袋を下げたまま冷蔵庫に向かった。祐子も立って亜希子が食料を冷蔵庫に移すのを手伝った。祐子が茶を入れた湯呑を3つ運んで来てセンターテーブルに置いた。賢はテレビを点けた。丁度10時だった。タイトル画面とミュージックに続いて、キャスターが「ニュース・フォーカス・テン！・・・今日は昨年の秋に起きた青森の殺人事件を取り上げました」と言った。キャスターは男性と女性のペアで、主に男性が話し、女性は相槌を打つ役のようなだった。祐子と亜希子がキッチンから戻って来てソファに腰掛けた。番組の初めにドラマ風にまとめられ

た事件のストーリーの説明があり、その後で事件の容疑者に附いての説明があった。竹下のことが「大阪のサラリーマン」と言う形で紹介されていた。当初竹下は容疑者として上がっていたが、彼が失踪していたので、当局が海外に逃亡した可能性もあると考え、捜査を行っていたとの説明があった。そして、暴力団の男が逮捕され、殺人を自供したことを説明した。そこまでは3人ともよく知っている内容だった。ここで殺人事件については解決したとの説明があり、それに続いて、何故暴力団の男が祖母と二人の孫も同時に殺人するに至ったかを説明していた。その話を聞いていると、賢達が追跡した失踪事件に絡む人間関係を完全に理解しているようには思えなかった。キャスターの説明の中には、竹下と大河原早苗の繋がりに関する話は出てこなかった。暴力団の男、蔓木元子、早苗の夫の痴情の纏れと、それを元に暴力団の男が早苗の夫と、早苗を脅迫している事実を義母に知られてしまって、殺意を持ったという説明がされていた。早苗の夫は蔓木元子との関係について暴力団の男から誤解を受けたと説明されていた。賢達3人は、暴力団の男と早苗の関係や、早苗と竹下との関係にまで話が及んでいないことに胸を撫で下ろした。竹下の失踪は、自分の車を盗まれた竹下を取り戻そうとして、車の中に頭れたと説明していて、それが不思議だという説明に留まっていた。キャスターは暴力団の男と早苗が同時に幻覚を見たようだと言った。そして、竹下が帰還したことについての説明があった。どのようにして帰還したかという点は、ディレクターの念頭に浮かんで来なかったようだ。番組制作者の頭が“不思議”の領域から抜け出していないことが分かった。一連の説明の後、例によって関係者へのインタビューがあった。先ず早苗の夫からだった。

「被害を受けられた大河原陽一さんに今回の事件について伺いました。大河原さん、ご家族3人を亡くされてさぞお悲しみのことと存じますが、暴力団の男がどうして殺人事件まで起こしたのか、その原因についてご説明頂けますか？」

「はい、わたしは事件当時大阪に単身赴任しておりまして、わたしの留守中に家族がこんな事件に巻き込まれてしまいとても悲しいです。犯人

の男は、わたしと一人の女性の間に関係があると言ってわたしを脅そうとしたのです。わたしは、全く身に覚えのないことでしたので、拒否しました。そしたら、わたしには何も言わずに、今度は妻に対して同じような強請(ゆすり)を行ったのです。わたしはそんなこととは露知らず、暴力団の男が引き下がったものと思っていました。ところが犯人は執拗に妻を脅しました。犯人からの電話を受けて偶然それを知ってしまった母が「警察に突き出す」と言ってしまったのです。それで、犯人は口封じに母とたまたま一緒にいた二人の娘を……」

そこまで言うと、大河原陽一は言葉に詰まって眼がしらを押しさえた。大河原陽一へのインタビューはそこで終わっていた。続いて、早苗へのインタビューがあった。別々の時間と場所であることは画面が変わったことで直ぐに分かった。

「悲しい出来事で、傷心でいらっしゃる所を申し訳ありません。今回の殺人事件が解決したことについて感想をお聞かせいただけますでしょうか？」

「はい、警察の方から暴力団の男が殺人を自供したと伺いまして、早速義母と娘達の仏壇に報告し、墓参しました。この1年間苦しんで来ました。どうしてわたくしたち家族に対して、このような非情なことをしたのか犯人を恨みました。京都の母が来てくれて、わたくしを慰め、一緒に生活してくれましたが、精神的には毎日地獄にいるようでした。しかし、恨みでは何も解決しないことが分かり、現在では毎日これまで共に生きてくださったお義母さまと二人の娘達に感謝し、お礼を言い、わたくしたちが犯人の行動を予期して3人を守ってあげられなかったことへのお詫びをしております。今は、この事件が解決したことに対する安堵感で何とか自分を取り戻せています」

「犯人の非情な行為に対する恨みはありませんか？」

「先ほども申し上げましたが、もう恨みは持っていません。それより、早く自分のしてしまった行為に気付き反省をして欲しいと思います」

「どうして、家族を殺された悲痛な心と殺人者に対する恨みを解消して、そのように悟ったような状態になることができたのでしょうか？」

「ある方がわたくしを導いてくださいました。その方のご指導で、わたくしと既にこの世のものでなくなった3人の意識が自然な状態に戻りました」

「差し支えなかったら、どなたにご指導頂いたか伺えますか？」

「申し訳ありませんが、それは申し上げられません。わたくしの心の中にしまっておきたいのです」

早苗のこの言葉で早苗へのインタビューは終わった。最後に竹下へのインタビューがあった。場面は全く変わり、また、別の場所でのインタビューだということが分かる。賢は直感的に大阪でのインタビューだと思った。竹下の話し方如何では早苗の過去の行動が公にされてしまう危険性がある。3人はインタビューを注視した。

「この殺人事件で、あなたにはずっと容疑者としての嫌疑が掛かっていました。しかし、あなたは失踪されていて、事件が解決するとほとんど同時に帰還されました。わたしたちはどうしてもあなたの失踪について理解できないでいます。そのことについてご説明頂けるでしょうか？」

「はい、わたしは大河原早苗さんのご亭主の友人です。彼の口から暴力団の男に強請（ゆす）られていることを知りました。わたしは非常に腹が立ちました。人を強請するような行為は許せなかったのです。勇気を出して、暴力団の男に会って、強請るのを辞めるように言いました。しかし暴力団の男は「うるせえ、てめえは、かんけえねえ、すっこんでろ」と言ってわたしの言うことを撥ね付け、わたしを突き飛ばしました。わたしが諦めて帰った後、わたしの後を追（つ）けたのだと思います。わたしの車を盗んだのです。わたしは衝撃を受けて、茫然自失しました。その時は誰が車を盗んだのか分かりませんでした。わたしは独断で大河原陽一さんの奥さん大河原早苗さんにも、陽一さんが暴力団の男に脅されているということを連絡しました。陽一さんが「妻には言いたくない」と言ってましたが、暴力団の男の悪辣さを知っていたので、早苗さんのことが気掛かりでした。実は大河原早苗さんはわたしの高校時代の同級生なのです。そのあと青森の自分の車の中で意識を取り戻すまでのことは全く記憶が無いのです。一時自分の自動車の中で意識が戻りまし



た。その時少し暑く感じて着ていたコートを脱いで座席に置いたのは憶えているのですが、またすぐに意識を失いました。最終的にわたしは大河原早苗さんの家で意識を取り戻しました」

「意識を無くしていた間、あなたはどなたにも目撃されていないのですが、そのことについて何か思い当たることはありませんか？また、どうして大河原早苗さんの家に姿を現したのか思い当たることはありませんか？あなたが大河原早苗さんの家に顕れた時、近くにどなたかいましたか？」

「本当に失踪していたときの記憶は全く無いのです。ただ、暴力団の男が大河原早苗さんの家族を脅している可能性があると思いましたので、そのことが一番心に引っ掛かっていたのは事実です。大河原早苗さんの家には早苗さんの他に早苗さんの友達が二人いました」

インタビューはここで終えた。キャスターは竹下のインタビューのあと、事件の解決についての祝福の言葉と、竹下の失踪について、「不可思議」という言葉でインタビューを締めくくった。最後に早苗を導いた者が麻子を導いた者と同一人物ではないか、それは一体誰なのかということと、麻子のインタビューの後、視聴者からその人物は誰かとの問い合わせが殺到しているということを説明して番組を終えた。祐子が言った。

「あなたのことね。わたしも青森に行きたかったな」

「昨日も申し上げましたが、お姉様、わたくしも涙が流れました。あの場にいたら誰でも感動したと思います。早苗さんの変わっていく様子が手に取るように分かりました」

賢は失踪事件調査ノートを開き、そこに遠野から青森までの記録を記入しながら二人の女性に語り掛けるように話した。失踪から帰還させる為には、失踪者の意識と帰還を働き掛けている施術者の意識が一体になる必要があること、施術者の心は浄化されていて引っ掛かりが何も無くなっている必要があること、失踪者が帰還するというを現実のこととして想定できること。決してぶれない一点集中力が必要なこと、そして何より、施術者は慈悲の心に満たされていなくてはならないことを説明した。二人の女性は頷きながら聞いていた。話し終わると賢は湯呑の茶

に口を付けてから橘に電話を掛けた。呼び出し音が5、6回鳴って橘が出た。

「もしもし、東京の内観ですが」

「内観さん、橘です。お久しぶりです。お元気ですか？」

「橘さん、わたしは元気になっています。そちらは如何ですか？所長さんが失踪されて大変ですね。所長さんの消息は分かりましたか？」

「いいえ、依然として行方不明のままです。誰かに拉致されたことは確かなようです。警察が必死に捜査していますが、今のところ菅生さんが同じ時に行方不明になっている点と、研究会の書類が全て無くなっていること以外に手掛りが掴めていないようです。われわれ会員は全員尋問されました。東京にいる会員さんについても事件当時に居た場所の確認をしたようですが、何分会員名簿も無くなっているのです。鹿児島の特例会員が記憶を辿って、会員ひとりひとりを確認している状態です。あなたと祐子さん、それに亜希子さんのことは、そちらにいらっしゃいますし、鹿児島での失踪のこともありますから、変な嫌疑を掛けられても思いまして警察には報告してありません」

「そうでしたか。いろいろ大変でしたね。わたしたちのことにまで気を使っただいて、本当にありがとうございます。メンバーの方々も皆さん心配しているでしょう？ところで、何かわたしに質問がおりと伺いましたが？」

「はい、実は原智明語録の内容について、あなたのご意見を伺いたい点がありまして」

「わたしよりあなたの方がよくご存じではないでしょうか。でも、わたしの考えでよろしければお応えしますけど」

「内観さん、あなたは実際に失踪を体験しているでしょう。だからあなたの考える内容は、机上の空論に翻弄されるわたしの考えより、遙かに真実に近いと思います。それで、是非お聞きしたいのです。あの原智明語録の32番目「DNAの意味」の最後の方に、「DNAを制御することで、世界の構造を変えることができる。究極的には人は宇宙を創造することができる力を内側に包含している」という一節がありましたが、

わたしは今、あの部分に心が引っ掛かって思考が空転してしまっているのです。あの意味を知りたくて、何かこうじっとしてられないというか。そこで内観さん、あなたなら何らかの見解をお持ちじゃないかと。もしあの文章が真実なら、なぜ今のような欠陥だらけの世界が出来てしまったのかと疑問に感じたりしているのです。所長さんの意見を聞ければ気も収まるでしょうけど、行方不明のままだし。だからと言って所長さんを救うことすらできない自分にジレンマを感じています。目の前のたった一本の鉛筆の置き場所さえ自分の意志で自由にできない自分に、世界を変えることなどできるはずは無いと思ってしまいます。どう考えますか？」

「橘さん、わたしはこう思うのです。先ず今あなたが最後におっしゃった「些細なことさえ自由にできない自分に世界を変えることなどできるはずはない」という言葉が、あなたを現状に固定しているのだと思うのです。わたしはDNAに書き込まれている情報は人間の意識の情報だと思うのです。意識は光に繋がっているんだと思います。光はエネルギーの振動でしょう。そして、あらゆる物質は究極的にエネルギーの振動に帰還できるでしょう。だからこの世界を構成しているあらゆる物質は人間の意識の作用でその存在形態に影響を与えることができるのだと思います。もしこの世界がこの通りだと思っていたら、この世界はこのままだと思います。わたしが思うに、人は一人一人の孤立した存在ではなく、全ての人、全ての生き物、全ての物と結びついた一体の存在だと思うのです。他の人の見ているもの、感じていること、考えること全ては自分が見て、感じて、考えていることで、エゴを捨て、全体を中心から眺めるとそれが理解できるはずだと思います。そうなった状態で意志することで、DNAが示す形態が顕れてくるのだと思います」

「つまり、内観さんは、自分が意志することで、この世界を変えることができるとおっしゃるのですね」

「はい。でもそれには条件があって、先ずこの現実を創っている既成概念を捨てる必要があると思います。それから、創造しようとする形態に対して不動の確信を持つ必要があります。例えば、今度の所長さんの拉

致事件にしても、関係者が、所長さんがどこかに幽閉されていて、もしかしたら身に危険が及ぶかも知れないと考えていると、その可能性が高まると思うのです。全員が、所長さんが救出されることを当然のこととして確信できて、その具体的なプロセスを思い描ければ、それが現実になると思います」

「でも、あなたと亜希子さんが失踪されたとき、誰もあなた方がそのような形で戻って来るとは想定していなかったと思うのですが……」  
「はい、その通りです。わたしが思うに、わたしたちの事件がどういう形で解決するのか、あるいはしないのか誰も分からなかったと思います。また、あまり意識に上がって来ていなかったのだと思います。敢えて言えば、身内の人たちや友人達の意識が影響したかも知れませんが、その人達も実際どうしてよいか分からなかったと思うのです。ですから、崎野祐子さんや藤代登紀子さんの強い意識が他からの影響を受けずに直接作用できて、私たちの帰還ができたのだと思います」

「と言うと、内観さんとしては、我々が所長のことを拉致されたと考えているから帰還が難しくなっていると言うのですね」

「いや、むしろ拉致の結果として、相手が所長を幽閉しているはずだと考えることが問題だと思います。いっそのこと、所長は拉致されたけど逃げ出そうとしていて、必ず脱出に成功すると思っていた方が、帰還の可能性は高くなると思います。関係者の意識を全てその方向に向けられるかどうかは鍵のように思いますが……ただ、この問題は拉致した人間の意識が絡んでいるのでそう単純ではないと思いますけど……」

「そんな風に変えたら、DNAにも作用するのでしょうか？もしそうだとしたら、どういう風に作用するのでしょうか？今、原生動物を使って、単細胞の生物に人の意識が何らかの作用を及ぼすかどうか実験をしているんです。シャーレの中にゾウリムシやアメーバーを入れておいて、倒立顕微鏡で泳いでいるところを観察しながら、意識を働き掛けてみているんです。まだ、はっきりした影響は確認できていませんが」

「面白いですね。何か分かったら教えてください。わたしとしては、人間の意識は常にDNAに影響を与えていると思います。所長さんを救出

しようとする意識も明らかにDNAに影響するはずだと思います。問題は影響を受けて変化したDNAの情報をRNAが何処まで現実に展開してゆき、実際の造形に反映できるかに懸かっていると思います。RNAはご存じの通り、タンパク質の作成に作用するでしょう。RNAの働きを活性化させるのが原智明さんの言っていた慈悲の心なんじゃないかと思うのですが」

「うーん、難しいですね。RNAにはまだ100種類くらいの修飾塩基があるというでしょう。それも役割の分かっていないものばかりで、その中に人間の様々な意識に反応する物や、感情に反応する物が在るのかも知れませんね。少し考えてみます。とても参考になりました」

「どういたしまして、僕の考えが少しでもお役に立てばと思います。では失礼します」

賢が電話を切ると、祐子が聞いた。

「橘さん、何を聞いたかったの？」

「DNAに対する人の意識の作用について、俺の意見を聞いたかったようだ。橘さんはDNAが意識の影響を受けるということについて、まだ納得がいかないようだよ。実際に失踪して帰還した者から意見を聞いたかったようだ。だから、俺や亜希子の意見を求めたかったのだろうけど、亜希子とはあまり話をしてないからな」

「はい、わたくしは橘さんとほとんどお話しておりません。それに、わたくしでは到底そういう難しいご質問にお応えすることはできません」やがて陽が高くなってきた。部屋に入る冬の日差しは、寒さを遠ざけるのには十分ではなかったが、ソファの辺りまで陽が差し込んで来ると、何とはなしに身体に暖かさが沸き起こってくる。

「数馬と亮子はどううまくいっているのかな？」

「一昨日亮子に会ったわ。料理教室に通い始めたんだって。もう、すっかり新婚気分よ」

賢は数馬に電話を掛けた。数馬のエネルギッシュな声が帰ってきた。

「おう、賢か。青森はどうだった？寒かっただろう」

「うん、すっぱり雪の中だ。亜希子も一緒だったんだ」

「亜希子さんは東京に帰っていたんじゃないのか？」

「いや、一緒に行動した。例の3番目の失踪事件も解決したぞ。遂に殺人犯も逮捕されたし。一応収束方向だな」

「おまえ、今度のプロジェクトに参加することになったんだってな。もう失踪事件ばかり追い駆けている訳にはいかないんじゃないか？」

「そうなんだ。だけどまだ失踪の原因が解明できた訳じゃないからな。1番目の失踪事件が解決したら、暫くは失踪事件から遠ざかって、プロジェクトに専念してみようかと思っている。今度はお前とも接触する機会が増えるかも知れないな」

「俺の会社の担当はシステムだから、はじめの仕様検討の段階ではいろいろ相談することが出てくるかも知れないな。いずれにしてもよろしく頼む」

「こちらこそよろしく頼む。ところで、亮子さんとは順調に進んでいるのか？」

「それはもう、休みの度に引っ張り廻されているよ」

「青森のみやげがあるんだ。今日時間があるか？」

「会社が引けたら夕方お前の所に寄るよ」

「分かった。じゃ、待ってる」

賢は電話を切ると、ノートを取り出して広げた。祐子が亜希子に向かって言った。

「青森で縄文遺跡に行ったの？あそこは縄文時代の遺跡がいろいろあるところでしょう。わたしも一度は行ってみたいの」

「お姉様、ごめんなさい。お姉様を差し置いてわたくしだけ連れて行っていただいたりして」

「どの遺跡に行ったの？」

「三内丸山遺跡です。純白な雪と感覚の無くなるような寒さが強く印象に残っていますが、資料館は暖かくて、土偶や鏃が沢山展示されていました。土偶って楽しいですね」

「そうなのよ。一口に土偶って言ったって、亀が岡遺跡の遮光器土偶のような意味深そうなものもあれば、木偶人形のようなシンプルなものもあ

って、思いは尽きないわね。わたしね、ああいうのを見ると妙に懐かしくなるのよ」

「そう言えば、三内丸山に行ったとき早苗さんも同じことをおっしゃってました」

「わたしたちはきっと、縄文時代に何度も生まれていたのね。亜希子さん、今度一緒に尖石遺跡に行ってみない？そこの縄文のビーナスは凄いついていう話よ」

「それは何ですか？」

「妊婦を模（かたど）った土偶なのよ。有名なのよ」

「そうなのですか。是非ご一緒させていただきたいわ」

「長野県よ。暖かくなったら行きましょう。あそこにはいろいろな土器が展示されているそうよ」

賢は二人の女性の話の外にいた。早瀬由美について考えをまとめたかと思っていた。早瀬由美の執着していたものを確かめたかった。降霊会や物質転送などは表面的なことだと感じた。彼女が求めていたのは絶対存在なのか、それとも愛なのか、それが分からないと呼び戻すことは難しいと思われた。「おもいで」の詩を読むと、どうしても早瀬由美は意図的に別の時空間に移動したとしか考えられない。浄蓮の滝で自分の前に現れた時、「このノートにわたしたちの秘密を解く鍵が書かれていて、その鍵で問題を解こうとしていたけど、もう一歩というところで時間が無くなってしまった」というようなことを言っていた。一体何のことだろうと賢は思った。賢は「おもいで」ノートを開いてみた。3ページ目に書いてある13の熟語節とその横に書かれた意味不明の言葉は一体何を指すのか、これが鍵なのかと考えた。賢はこれらを失踪事件調査ノートの早瀬由美の頁の次の頁に記入して、暗号のような3字表現単語の横に「解釈」と追記した。そして一行毎に、今まで失踪事件を通して理解してきた内容を当て嵌めてみた。

めざめて

解釈

無限の黎明 闇の音 世界開闢の時、闇に一つの反響が響いた。

七人の娘達 夢の現 そこに7つの存在が、夢幻のごとく顕れた。

群青の世界	水の色	闇には水が実体化し、世界は青色に染まった。
宇宙の誤謬	円の点	宇宙は一点であり、夢は円の様な空間を仮定した。
極微の探索	輪の形	ミクロの世界は無限大の世界と繋がっていた。
一人の飛翔	心の果	人が現れ、心の作用の結果、物質世界ができた。
空間の認識	実と空	空間と時間を認識し、現存在と虚存在が確立した。
内外の拡大	有の壊	現存在の世界が拡大し、その結果崩壊が起きる。
自他の和合	生の智	個存在が融解し、自他が統合に向かう。
経綸の顕現	虚の現	虚存在の認識が可能になり、顕現が可能になる。
振動の偏在	無の理	全てはエネルギーの振動で、実体は無となる。
全体の融合	喜の海	全てが一つとなり、その統合で歓喜が生まれる。
存在の彼岸	愛の淵	全存在は慈悲で満たされ、彼岸の淵に到達する。

巡り巡る

賢はこれが宇宙の成り立ちと輪廻を物語ったものだと解釈した。そして海の老人や原智明が言う内容にも通じると思った。自分の書いた解釈を見ていて、賢ははっと気付いた。今、自分たちは「内外の拡大・崩壊」から「自他の和合・認識」に至るプロセスにおいて、早瀬由美はそれを実行に移したかったのではないかと思った。そして、早瀬由美が自他の融合を果たせる相手を探しているような気がした。それが即ち「わたくしたちの秘密を解く鍵」であり、生きる意味であり、自分を知ることだと理解した。早瀬由美は自分一人が他との融合を果たそうとした訳ではなく、そこから全体の融合に進む道を求めていたのだと思いたかった。多分自他の融合から全体の合一までのプロセスが見えなかったのだろう。しかし、時間が無いということと、浄蓮の滝の空間に戻らなければならない理由は依然として分からなかった。賢は亜希子の声でここにふたりの女性が居たことを思い出した。

「賢さん、お茶を入れ替えました。一息入れてください」

「ありがとう、随分時間が経ったのかな」

「あなた、1時間ほどノートとにらめっこしていたわよ。今、亜希子さんから青森の話を聞いていたのよ。あなた、全く耳に入っていなかったようね」



「うん、別の世界に居た。早瀬由美さんをどうやって帰還させようかと思っていたんだ」

「それで、見通しはついたの？」

「うん、何とかな。今までとは違うアプローチになりそうだ」

「聞かない方がいいんでしょ。いいわ、聞かない。でも、あちらの世界に引き込まれないように気を付けてね」

「うん、その対策をしてからでないと危険だな・・・明後日か」

「材料を一杯買って来ましたから、お昼は何か美味しいものを作ります」  
亜希子がソファから立ち上がりながら言った。祐子は窓の外に目をやった。雲一つ無い青空が広がっている。降り注ぐ光線が部屋を満たし、朝の冷気は影を潜めていた。

「暖かくなってきたわ。ねえ、お正月は初詣に出掛けようか？」

「そうだな。行くとしたら何処がいいかな」

「大勢の人がお参りする所がいいんじゃないか？」

「諏訪大社はどう？あの神社は本殿が無くてご神体が山なのね。神を造物主の様に祀っているの・・・そうそう、それに、お参りの帰りに尖石遺跡にも行けるし」

「尖石、それは何？」

「尖石遺跡よ、縄文時代の遺跡。さっき亜希子さんと、春になったら出掛けようって言っていたのよ。初詣で長野に行けばその帰りに寄れるでしょ。どうかしら、亜希子さん」

祐子が亜希子に声を掛けた。亜希子が調理の手を止めて応えた。

「はい。お正月を諏訪で過ごすのも素敵ですね。火炎土器を見るのも楽しみです」

「もう諏訪大社に出掛けることに決まったのか？」

「あなた、いいでしょう。あと一月ばかりね。準備しなくちゃ」

「祐子、諏訪大社の主宰神はどなただ？」

「確か、建御名方命（たけみなかたのみこと）と八坂刀売命（やさかとのみこと）だったと思うわ。あの神社は上社と下社に分かれていて場所も離れているのよ。上社が建御名方命、下社が八坂刀売命だったと思

うわ。その上社も本宮と前宮に、下社は秋宮と春宮に分かれているの」  
「祐子は本当にこういうことに詳しいな。建御名方命（たけみなかたのみこと）はどんな神様なんだ」

「日本の国を守る神様よ。大国主命の第2子だったようね。元々諏訪にいらした神様で、国を守ろうとして天照大神の国譲りの指示に最後まで抵抗した神様よ。その妃神が八坂刀売命（やさかとめのみこと）よ」

「お姉様、よくご存じですね」

歴史や民話を語るときの祐子の顔付きはいつも輝いている。亜希子にも感心されて少し照れた。

「国譲りというのは一体何だったのかな？縄文から弥生への移行なのかな。信州に縄文遺跡が多いのは、あの辺りに縄文世界を代表する1大勢力があったということかな」

昼食を済ますと、ソファーに戻りながら賢が言った。

「ふたりともカバラって知っているか？」

「フランスの高級クリスタルグラス？それともコニャックの一種だったかしら？」

祐子が応えた。亜希子が少し遠慮がちに言った。

「お姉様、それ、バカラじゃないですか？」

「そう、バカラだわ、いやね。そうそうカバラって、占いか何かで聞いたような気がするわね」

「そっちの方が近いな。タロット占いで聞いたんじゃないか？カバラってのは、伝承という意味のヘブライ語で、生命の樹という象徴の形を用いて宇宙の発生から終末までを説明したものだ。どうも、原智明語録や海の老人、それに早瀬由美さんの事を調べていると、あの人達の言っていることが、このカバラの内容に近いような気がするんだ。問題は、あの人達が何故今、そんなことを言うのかということなんだが・・・」

「あなた、そのカバラについてすこし説明して」

「賢さん、よろしくお願いします」

亜希子も「あなた」と呼び掛けたかったが、祐子の前では言えなかった。

「分かった。俺の知っている範囲だけど、というのはカバラは秘儀の伝

承だから、簡単には理解できないんだ。俺も説明し切れるかどうか自信が無いからな。参考程度に聞いてくれよな」

「あなたに分からないこと、わたしたちに分かるわけないわね。ねえ、亜希子さん」

「ええ、お姉様」

「カバラはユダヤ教の起源となっている思想さ。宇宙創造論から、終末論、メシア論を伴う思想で、ほかの宗教とは異なる宇宙観を持っているんだ。世界の捕らえ方が密教と似ていると言う人もいる。カバラはユダヤ教の立法を理解し遵守するという意図で著されたようだ。ふたりともモーゼの十戒は知っているだろう。モーゼがシナイ山に3度籠もったんだが、その3度目の40日間の最後の日に神から伝えられたと言われている。カバラでは世界の創造を10段階に分けて球形で表して、それぞれの段階を22の経路で結んだ生命の樹という意味のセフィロトと呼ばれる象徴図で説明しているんだ。その書はヘブライ文字の22文字で書かれていて、それぞれの文字が宇宙の原理となる要素を象徴しているらしい。そのヘブライ文字のアルファベットや数字の持つ意味を解釈すればカバラの示す真の意味を理解することができると言われている。文章で示す意味以外に、アルファベットの一字一文字や数字の一つ一つに宇宙の原理を含ませて文章を書いているから、当然それは暗号となっているらしい。滅多なことでは解釈できないはずだ。これを解釈しようとして数秘術なるものが生まれたようだ。ずっと後になってカバラからは錬金術をはじめ、いろいろな魔術的な神秘思想が生まれてきた。さっき言ったタロットなんかもカバラから出た占いだよ。この宇宙は球体（円）だと考えられていて、初めに全ての概念を超越した不可知な無の「アイン」が凝縮していった無制約「アイン・ソフ」となる。それから、アイン・ソフが更に凝縮して点が生じ、点は無限の光の「アイン・ソフ・オウル」を放って、限定された物質世界が生じたとしている。これは現代のビッグバン思想だな。だけど、ビッグバン思想の方がカバラを真似たとも言える。カバラは高次元の世界を理解する実践的な方法だと思う。そしておれ達がこの世界に生きている間の存在意義を説いているもの

のようだ。カバラの教えを実践すると、おれ達は理想的な状態に到達して、人生を自分の意志でコントロールでき、時間と空間の制約を超越することができるということだ。そうすると、人生の本当の目的を認識できて、この世界に生きながら静穏で際限のない至上の喜びの境地に到達することができるという訳だ。西洋的なものの考え方だな。おおよその意味はこういう事だけど、カバラを実践しようとするのは並大抵の事じゃないと思うよ。もっとシンプルに考えた方がいいと俺は思うけどな」  
「なんか難しそうね。わたしたちも練習すればその超越的な状態に至ることができるのかしら？」

「最近はそんなことを教えているグループもあるらしいな。だけど、商売絡みになっていて、自己実現を通して金持ちになるなんていう捻れた目的を達成させようとしているところが多いみたいだな。実際効果があるかどうか疑問だ」

「賢さん、カバラの実践のこともう少し詳しく説明していただけますか？」

「うん、カバラは神が宇宙の創生を1000程のステップを踏むことで実践したとしているんだ。だから、我々がもし、そのステップを実現出来ればこの世界を変えることもできるということなんだ」

「でも、この地球上には数え切れないほどの自然の産物があるし、その一つずつが気が遠くなるほどの構造を持って作られているでしょう。それに70億以上の人たちが住んで、生活していて、それぞれ思い思いの行動をしているでしょう。その社会を自分の意志で変えることができるとは思えないわ」

「そう考えるだろう。今ではそれが普通の考え方になっているのさ。だから、今の世界が維持されているんだな。この辺は俺の考え、いや原智明さんや海の老人の考えとも通じるところさ」

「具体的には、カバラではどうすれば世界を変えられると教えているの？」

「俺の知っている限りでは、先ず現在の常識、知識、規範、そういうものへの概念や執着心を全て捨てることから始めなくてはならないよう

だ。そして、最終的には自己も捨てる。それから創造のプロセスを始める」

「自分も捨ててしまうの？それじゃ何も残らないんじゃない？」

「そうさ。矛盾するようだけれど、そうしないとこの世界を変えることはできない。いいか、先ず前提条件を無くすわけだ。それから、先ずこの世界が一つの有限な世界だと理解する。そして、この世界がホログラフィの様な構造になっていると理解する。つまり全てが繋がっていて、一部が変わると即座に全体に影響を与えると理解する。そして、この世界が自分自身だと感じる。次ぎに、ここが一番難しいところだけれど、あらゆるものに対して慈悲の心を持つ。何を見ても愛おしいと感じる様になることだ。更に、いつも喜びの中に浸っている自分を感じることだ。そして、自分の意識していることが現実を作っているんだと理解する。自分の意識によって創造ができると考える」

「あなた、あなたの話を聞いていると、失踪した人を元に戻そうとしているときにあなたがやったことと、どことなく似ているような気がするわ。ねえ、亜希子さんそう思わない？」

「はいお姉様、わたくしも今そのように感じました」

「そうさ、失踪者を帰還させようとして俺がいつもやって来たことは、これとほとんど同じ事だ。ただ少し違っているのは、愛情の気持ちで自分を満たし、そこからは更に失踪者を引き戻そうとする執着を作り出す過程を付け加えていることぐらいかな」

「そうなんですわね。そうするとカバラの教えを実践することはそれほど難しい事じゃないんですわね」

「いや、そんなに簡単な事じゃないさ。それは俺たちだからできているんだ。この社会に根を下ろした生き方をしている人じゃ難しいと思うぜ」

「わたしたちは根無し草！何だか響きが悪いけど、その方がうまくゆくのね」

「今の俺達ってそんな感じじゃないかな。これから暫くは、俺はまた社会的な面で固まって行かなければならないから、プロジェクトにどっぷり浸かると、失踪者の帰還に拘わるのが難しくなるかも知れない。君た

ちも、俺と行動を共にする覚悟だとすると、同じような状態になってゆく可能性があるな」

「わたし、それでいいのよ。その方がいいの」

「わたくしもそうです。賢さんと共に変わります」

「話が横道に逸れたけど、俺がカバラの話を持ち出したのは、君たちに今俺が考えている事を理解してもらおう為だ。カバラが全てだとは思わないが、カバラはほとんどこの世界の核心を突いていると思うんだ。そこが出发点で、そこからなら次の段階に伸展できる様な気がする」

「あなた、いつカバラを勉強したの？あなたがそんな書物を読んでいるのを見たことないわ」

「そう、俺速読するから、いつ読んでいるのか分からないかも知れないな。ほら、その書棚の上段に東京ブックガーデンのカバーの掛けてある本が2冊あるだろう。それがカバラの本さ」

祐子と亜希子は書棚に目をやった。確かにカバーを掛けた本が2冊ある。祐子は立ち上がって、その一冊を手を取った。

「一寸見てもいい？」

「どうぞ。だけど難しいぞ」

祐子は最初の章を開けて読み始めたが、すぐに降参してその本を亜希子に渡した。亜希子は祐子より長い間読んでいた。長いといっても精々2、3分だが、やはり降参してその本を書棚に戻した。

「わたくしにはこの本は読めません。読んでも意味が頭に入って来ません」

「わたしなんて、はじめから受け付けないわ。あなた、よく速読できるわね」

「うん。俺は内容に興味があるからな。半分は読んでいるというより、確認しているといった感じだな」

二人の女性は、改めて賢の能力に脱帽した。

「わたしはあなたから聞くから、易しく教えてね」

「わたくしにも教えてください」

「俺も、完全に理解している訳じゃないよ。上辺の意味しか読み取れて

いないからな。でも、俺の知っていることはみんな説明してやるよ。どうだ、カバラとはどういうものか少しは分かったか？」

二人は頷いたが、祐子はまだ物足りなそうな顔をしながら言った。

「でも、カバラの教えを実現するには、いろいろ条件があるのでしよう。それを教えてくれないかしら」

「それはさっきも言ったように、全ての固定概念を捨て、自分を空しくして、全体が一つだと思って、あらゆるものに対して慈悲の心を持つことさ。先ず裸ぎをして、次ぎに瞑想ができるようになることかな」

「何だか簡単そうじゃない」

「そう、君たちにとってはそれほど難しい事じゃないかもしれないよ。何しろ、祐子は俺と亜希子を帰還させたし、亜希子は自分をテレポートできるんだからな。ふたりともこの世界の事象に対してそれほど強い引っ掛かりを持っていないから、あんなことができたんだろうな。つまり、心が純粹ということだよ」

「あなた、わたしたちはカバラの教えを実行することで人生に意味を持たせることができるのかしら？」

「カバラは神の子のひとりメルキゼデクという生き通しの存在がモーゼを通して人類に教えたとされているんだ。これを実行するのは極めて難しいんだけど、だけど、これを実行しただけではまだ十分ではないような気がする。それは、カバラが自己実現のプロセスの教えで、カバラを学んだだけでは宇宙創成の原理が把握できないと思うからだ。この次元の中では、瞑想を通してしかカバラの元にある核心を認識できないように思うんだ」

「あなた、そこまで探求するのですか？」

「そうだ。次第に核心に近付いているという信念を持って探求し続けようと思う。何故かそうしないと行かない」

二人の女性は、それ以上は聞かなかつた。3人は午後の時間を資料の整理に当てた。やがて遠くのビルが夕日の反射光でオレンジ色に輝き始めた頃、3人は資料の整理にも疲れてきた。亜希子がキッチンに立ってコーヒーを入れて来てセンターテーブルに並べていると、チャイムが鳴っ

た。数馬のようだ。賢がゲートを開放して暫くすると数馬と亮子が入り口に現れた。祐子と亜希子も賢に附いて数馬達を出迎えた。相変わらず元気な数馬の声が部屋の中にまで響く。

「おう、元気そうじゃないか！東北は寒かっただろう。風邪引かなかったか？」

「やあ、亮子さんも一緒か。結婚の日取りも決まってよかったな。おめでとう！」

祐子と亜希子も二人に祝福の言葉を贈った。

「祐子と亜希子が来ているから、全員揃ったな。婚前祝賀パーティということにしちゃおうか」

賢がそう言うと、亮子が顔を赤らめてはにかみながら、「はい」と言って紙袋を賢に渡した。中には白ワインが2本入っている。

「おっ、亮子さんもそのつもりだな」

「数馬さんが、きっと祐子さんや亜希子さんも来ていると思うから、ワインを買って行こうって言うので」

「さあさあ、先ずは中に入れよ」

5人は部屋に入った。亜希子はそのままキッチンに向かった。賢は棚から2つの紙包みを取り出した。

「数馬、はいお前に！それからこれは亮子さんに！」

ふたりは弾んだ声で礼を言うと、包みを解いた。数馬は箱から夫婦湯呑を、亮子ははと笛を取り出し、共に顔を見合わせて嬉しそうに微笑んだ。亮子はそれを吹いて嬰兒をあやしている自分の姿を思い描いて嬉しくなった。亜希子がコーヒークップを2つ盆に載せて持って来て、数馬と亮子の前に置いて祐子の隣に座った。

「賢、今度のプロジェクトそろそろ動き始めるぞ。政府もほぼ参加企業を絞り込んだようだ。一説じゃ50社を超えるようだぞ。関連会社まで入れると200社以上だって言うぜ。いま政府の主管長名で各企業にメンバー名簿の提出を指示した段階だ。恐らく来年の四月がキックオフになるだろう。そろそろ初年度の予算案が確定する段階だ。政府はこのプロジェクト資金を各省庁の予算の中から捻出する計画のようだ。事業仕



分けの網をどう潜り抜けるか一工夫必要だがな。特に文部科学省と建設省、それと経済産業省が主幹省になるけど、嘗ての道路特定財源の転用も考えているようだ。来年度は政府から一兆円規模の投資があるようだ」  
「そうか。ということはインフラ整備が念頭にあるな」

「まあ、初年度はほとんど頭の中の仕事になるんじゃないかな、それと土地の確保もある」

「社会保険庁がやったような失敗は許されないからな。運営費用を含めて採算が取れるようにしなくてはならないということもあるしな」

「政府のずるいところは、完成後の集客部分は民間に任せるといところさ。つまり、運営を担当する企業は採算を採ることが第一前提になるって事だ。だから、運営担当企業は企画、設計、施工の企業に対して鋭い仕様の要求を突き付けて来ると思われるんだ」

「しかし、このプロジェクトは理念が先行するプロジェクトだろう。人によっては日本人の意識を変えるなんていうでかい理念は、雰囲気では考えられないんじゃないかな」

「そうなんだ。そこが一番問題なんだ。核心部分の目的が分からない企業が大半じゃないかな。どうやってコントロールするか至難の業だな」

「総責任者は誰なんだ？」

「建前上は総理大臣さ。しかし、担当大臣は置かないで、文部官僚のトップを実質上の指揮者の任務に当たらせるようだ。というのはあくまで国民に対しては表面上は教育サポートセンターの建設程度の認知しか与えないつもりだからだ。きっと国民や左派の反発を恐れているんだな。どちらにしても野党は猛反発するだろうがな」

「ところで、数馬、おまえはこのプロジェクトの真の目的を知っているのか？」

「うん、薄々は気付いている。今、日本人の意識が物質面に流れ過ぎているから、政府が国民の意識を精神面を重視した意識に変えようとしているんだろう。しかし、こんなプロジェクトを立ち上げなければならぬほどそんなに切羽詰まっているのかな」

「うん、まあ、そういうことのようにだな」

賢は真の目的については説明しなかった。まだ時期尚早だと考えた。しかし、四人の仲間にはいつかは説明しなくてはならないと思った。まだ、国内では賢と秘密組織のメンバーだけしか知らないことだと藤代肇が言っていた。もう10年以上も前から地球の変容については語られ、それに向けて活動をしているいくつかのグループが存在していた。しかし、その効果がどの程度期待できるかは未定だし、ましてその成果を地球全体にまで敷衍させることができるのかということになると、極めて曖昧模糊としている。これまで今回の様に国家的な取組が行われたことはなかった。「日本人を100匹目の猿にすることができるか否かが成否の分かれ目になるな」と藤代肇は言っていた。

「100匹目の猿か……………」

賢が一人言のように呟くと、数馬は怪訝な顔をしたが、そんなことは意に介さないと言わんばかりに、

「ところで、おまえはどういう形でプロジェクトに加わるんだ」

「うん、藤代肇さんから東領製作所のプロジェクト責任者になれと言われている」

「えっ、何だって？東領製作所のプロジェクトといえば、今回のプロジェクト全体の牽引役となる中核プロジェクトじゃないか。そのリーダーって…………おまえ、とんでもない役目だぞ。藤代社長がそう言ったのか？」

「うん、そう言われた。一時は俺も辞退したんだが、藤代肇さんの信頼を裏切るわけにはいかないので引き受けることにしたんだ。全力投入になる」

「それは凄い。しかし、藤代社長はなぜお前にそんな重大な役目を任せようとしているのかな。日本でもトップレベルの企業の会長なのだから、お前には悪いが、こういうことに長けた凄い人材が五万といると思うんだがな。まあ理由は兎も角、凄いことだ。これから鮮烈な戦いが展開しそうだな。俺も微力ながら支援するよ。もともと俺自身も自社のプロジェクトにのめり込むことになるから、同じ穴の貉になるだろうが…………」

「狐や狸じゃなくて、虎になってね」

祐子が割って入った。亜希子と亮子はきょとんとした顔をして祐子を見た。賢と数馬は声を上げて笑った。

「勇猛果敢に戦って欲しいのよ」

「数馬、よろしく頼むぜ。人間がどこまでできるかを知るいい機会だから、俺も全力を投入する。明日、早速俺のアシスト役をしてくれるという人たちに会うことになっているんだ」

「そうか、おまえもいよいよ始動するんだな」

「プロジェクトの話はこれくらいにしよう。もう一つの大切な話をしてくれないか？」

「う、うん。式の日取りが決まったんだ。6月の第2日曜日に新宿のクイーンズプラザホテルの式場で挙式と披露宴をやることにした。午前11時から1時までの予定だ。みんなよろしく頼む」

「よろしくお願い致します」

亮子が顔を赤らめて頭を下げた。数馬の自信ありげな態度と対照的だった。祐子と亜希子は祝福の言葉を掛けた。

「亮子、おめでとう。わたし、本当に嬉しいわ。幸せになってね」

「亮子さん、おめでとうございます。素晴らしい家庭を作ってください」

亮子は目に涙を浮かべている。

「みんなありがとう。運良く最高の日取りが確保できたんだ。不思議なほどだ。なあ、亮子」

「そうなの。ほとんどの式場がこの時期は予約が入っていて、今からでは不可能だと言われたの。でも、希望の5つのホテルにキャンセル待ちに加えていただくことにしたの。そのキャンセル待ちも、みんな3番手から4番手で、到底無理だと諦めていて、数馬君と秋まで待とうかって言っていたのよ。そしたら、クイーンズプラザホテルから連絡があって、初めは信じられなかったわ。不思議なこともあるのね、予約していたカップルが婚約解消になって、わたしたちの前に3組の予約キャンセル待ちのカップルが繰り上げになったんだけど、その3組が揃いも揃って結婚の日程を変えたり、延期になったりして、辞退したらしいの。こんな事ってあるのかしら」

「亮子さん、クイーンズプラザで結婚式を挙げたかったんだろう。挙式から披露宴まで頭の中で想定して、イメージを描いていたんじゃないか？」

「うん、毎日ドレスのことや席の配列やデコレーションなんかを、「ああしよう、こうしよう」と考えているわ。婚約してすぐにわたし、テレビで俳優の山口博美の披露宴を見たのよ。素敵だった。感激しちゃって涙が流れたわ。わたしも同じように、いいえもっと素敵にやりたいって思ったの。その後で数馬君と一緒に、披露宴会場を見学したの。結局予約待ちの申込をすることになったんだけど、でも、ここしかないと思ったわ。ここで式を挙げるって思ったの。それからは他の式場のイメージは描けなくなってしまったわ」

「そうなんだ。亮子がクイーンズプラザのことばかり言っているので、「もしここで披露宴ができなかったら、どうしよう」と思っていたんだ。ほっとしたよ」

「やはり、そうだな。もう、亮子さんが自分の意識で現実を作ってしまったんだな。6月XX日は亮子さんにとっては今なんだな。さあ、我々もこれからいろいろ準備だ。なあ祐子、亜希子」

祐子と亜希子は微笑みながら頷いた。祐子、亜希子、亮子の3人はパーティの支度をすると行ってキッチンに立った。

「ところで賢、原智明研究会の新しい情報知っているか？」

「さっき、正会員の橘さんと話したばかりだが、おまえ何か知っているのか？」

「それがな、これは鹿児島島の協力会社からの情報だがな、あの所長さんは海外の犯罪組織に拉致されたんじゃないかって噂があるんだ。一寸危ない話なんだ。俺は詳しいことは知らないが、何でも原智明語録には悪用されると、簡単に地球を破壊できるような装置が作れる、数式みたいなものが書かれていたらしいんだ。それを嗅ぎつけた組織が所長さんを拉致したんじゃないかって噂だ。本当かどうかは知らないけど」

「火の無いところに煙は立たないって言うから、その危険性があるって事なんだな。所長さんだけじゃなくて、研究室にあった一切の書類の所

在が分からなくなっているだろう。もし誘拐されたとして、犯人が書類を盗んだのなら、所長さんは危険な目に遭っている可能性が大きい・・・  
そうだ、亜希子に少し挑戦してもらおう」

「亜希子さんに？何を？」

「遠隔透視だ。所長さんとの面識が薄いから難しいかも知れないけど、  
なあ・・・亜希子！一寸来てくれないか？」

「はい」と返事をして亜希子が前掛けで手を拭いながら賢の横に来た。  
「亜希子、原智明研究会の所長さんの事を知っているだろう。少し、彼の居る場所を透視してみてくださいませんか？」

「できるかしら？少し時間をください。意識を鎮めて集中してみます」  
亜希子は賢の隣に座ると、暫く瞑想していたが、やがてぼつり、ぼつりと話し始めた。

「広い、一面の青い色が見えるような気がします。・・・その青い色は空一面に広がっています・・・そして、目の前にも青い色が広がっています。その青い色のすぐ手前には白い色が一面に広がっています。その白い広がりの中に木が3本立っています。人は一人も見えません。どこかの海岸じゃないかしら。遠くに白い道が見えます。海の中かしら。海の中にずっと続いているようです。でも、自動車は走っていません・・・窓があります。そう、海岸に立っているコテージのようです。一寸大きめの建物です。その中に初老の男性が居ます。そこには他にも4、5人の若い男女と一緒に居て、初老の男性を取り囲んでいます。テーブルがあります。テーブルの上には水差しといくつかのグラス、そしていろいろな果物が載っています。南国のようです。果物はパイナップルやマンゴーのような南国のものです。初老の男性は所長さんのように見えます。その人を取り囲んでいる人たちが話し合っては、その中の一人が所長さんの様な人に話し掛けています。所長さんの様な人は首を横に振っています。外が急に暗くなってきました。イメージがはっきりしなくなってきました」

そこまで言うと、亜希子は目を開けて深呼吸をした。

「所長さんを意識して、そこに意識を集中したら、南国の海岸にあるよ

うなコテージが見えて、そこに所長さんのような人がいる場面のよう  
なイメージが浮かびました。わたくしにはこの程度のことしか見えませ  
ん」

「亜希子、ありがとう。疲れたろう」

「いいえ、大丈夫です」

「亜希子さん、凄いんだな。透視ができるんだ。つまり、所長さんはど  
こかの南国の海岸に無事である可能性があるわけだな。それだけでも大  
きな収穫だ」

「まだ、わたくしには詳細を把握する力がありません。唯、ぼんやりし  
たイメージが額の奥に浮かぶだけです」

「いや、たいしたもんだ」

「この程度でよろしいでしょうか？」

「ありがとう、とても参考になったよ」

亜希子はキッチンに戻った。女性達の笑い声がした。やがて女性達がコ  
ーヒーカップを片付け、フランスパンにサラダ、チーズとハム、ウイン  
ナの盛り合わせ、ピーナッツ、チョコレートスティック、を運んで来て  
所狭しとセンターテーブルに並べた。そして、最後に祐子がワイングラ  
スとフォークを盆に載せて持って来て、一人一人席を確認しながら並べ  
ていった。賢と数馬が向き合って座り、賢の両側に祐子と亜希子、数馬  
の隣に亮子が座った。亮子がワインのボトルを持って席に着くと、全員  
のグラスにワインを注いだ。賢が音頭を取って乾杯した。パーティは歓  
談の中で続いた。女性達は入れ替わり立ち替わり食べ物や飲み物を取り  
にキッチンに立った。女性達もいつになくワイングラスを傾けた。9時  
を廻った頃には全員がほろ酔い状態になっていて口数も減ってきた。亮  
子が言った。

「数馬君、そろそろ失礼しましょうか」

「そうだな、あまり遅くなっちゃいけないしな」

賢達は階下に降り、エントランスから出てふたりを表通りまで送った。  
ふたりが交差点を曲がり、姿が見えなくなってから部屋に戻った。

「幸せそうだな。今が一番だな」

「本当に亮子、幸せそうだったわ。亮子は平凡な家庭を希望しているから、一番幸せを味わえるかも知れないわね」

「はい、お姉様。わたくしは社会の規範から外れることにそれほど抵抗を感じなくなったと思っていましたが、亮子さん達の幸せそうな姿を見ると、結婚も捨てたものじゃないような気が致します」

「わたしたち、社会の規範を自分たちの意志で超えられるかどうか試されているような気もするわね。郷愁があるでしょう。家族とか、地域とか、国とか。これを超えるのは難しいわね。でもわたしは超えられると信じるわ。このひとへの信頼は死んでも揺るがないと思うから」

「わたくしも超えられます。賢さんと一緒なら」

賢はそれには応えなかった。アパートに戻ると賢がふたりに言った。

「今日はありがとう。君たちを家まで送って行くよ」

「わたしたちは大丈夫よ。ねえ、亜希子さん」

「はい、大丈夫です。わたくし、おいとまする前にパーティの後片付けを済ませます」

「わたしが後片付けをするから、亜希子さんは洗濯物を頼むわ」

ふたりが片付けを済ませると賢は上着を着た。大丈夫だというふたりの言葉に微笑みで応えながら、賢はふたりの後に続いて外に出た。ほろ酔いの気分に初冬の夜風が心地よく感じられた。祐子もコートの前を広げたまま頬で風を切るようにして歩いた。亜希子はコートのボタンをきちんと締め、毛糸の手袋をして冬を演じている。ふたりは直ぐに賢の左右の手に絡みついた。賢はふたりを青山の家の前まで送った。ふたりは門の前で賢の姿が見えなくなるまで見送ってから、通用口を潜って中に入った。

賢が家に戻ったのは10時半を廻った頃だった。部屋に入ると、先ほどまで一緒にいた仲間の占めていた空間にボイドがあるような錯覚を覚えた。英語の **missing** とはうまい表現だと思った。日本語の空しいという言葉が近い意味で使われているのを思い、これらの言葉が元の「不在」という意味から離れて新たな意味を持っていることを知った。自分達は永遠にあり、永遠に変わらない。この場の空しさは自分がこの空間

と時間に縛り付けられているから生じている。アルコールの影響かも知れなかった。そして、その感覚も楽しいものに思えた。

翌日、賢は朝からプロジェクトの形態についてイメージを纏めた。この日に会うことになっている自分のアシスタント役に対して、最低限プロジェクトのミッションと自分の理念、それと取り組み姿勢を明確にしておく必要があると思った。賢は藤代肇が言った言葉を反芻してみた。人類救済は自分の理念としてはあまりに僭越に過ぎると思った。それは最終的なミッションではあるとしても、自分の参加するプロジェクトの目的ではなく、方向性であると思った。最近感じた「縄文時代の人間の生き方を再現」ではあまりに突飛すぎるし、「日本人の精神性改善」では漠然とし過ぎていて捉えどころが無く、インパクトも感じられないと思った。

「そうだ、藤代肇さんが言った慈愛をベースにしよう。それには今社会問題となっている個々人の分離の概念を払拭し、愛情で結ばれた一体感のある生活空間を作ることしよう」

そう思い付いた。そのベースとなるのは「家庭」であるはずだった。「家族の絆を強め、物質偏重から精神性重視の世界への変革」と位置付けようと思った。しかし、自分が家庭という構造を模範として示せないことが一つの足枷になるかも知れないと感じた。それでも組織における人の結びつきの大切さは、現代社会の規範の中では最も有効に働くと思われた。結局「人と人との結びつきを強め、物質偏重から精神性重視の日本に変革する」をミッションに据えることに決めた。これを推し進めると、物作りを標榜している日本の大企業の大半が反発してくることが想定された。だが、日本の企業の変わり身の早さは驚嘆するものがある。一旦風潮が広がれば、必ずや多くの企業が精神性の向上をその理念に掲げるようになるはずだ。

「よし、この考えを伝えてみよう」

賢は心に決めた。理念は「愛と慈悲に満ちた国を再構築する」とすることにした。この考えは藤代肇の考えからずれてはいないと思った。そして、そこからが一番厄介なこと、自分がプロジェクトのリーダーとして



やっけてゆくことだ。全員が反発するという固定概念で自分を縛ることは避けようと思った。今日会う二人は非常に親近感を覚える男性だと想定した。人の特性から、最初から一步引いて下手に出ることは不味いと思った。藤代肇の意志に従ってありのままの自分を見せ、その上で自分の天性を信じて方針を打ち出そうと思った。「全て協議して進める。重要事項の最終決定は藤代肇さんの承認を得て自分が行う」これだけで十分だと思った。細目はルールを作って、そのルールの下でプロジェクトを運用しようと考えた。賢は書棚の引き出しから1冊の新しいノートを取り出して、表紙に表題として「プロジェクトノート」と記入した。1ページ目を開き、今考えたミッションを書き込んで、続いて2ページ目に理念を書き込んだ。3ページ目にはルールと書き込んだが、その後は空白にしておいた。その方が固定概念を持たずに済むのでいいと思った。そこで思考を止めて、賢は窓の外に目を移した。昨日とは異なり、灰色の雲が重く押し掛かって来ていた。隅田川の川面に数羽の鷺が舞い降りていた。川口にはまだ灌木の生えている場所がある。鷺は川の淀みで餌を啄んでいるようだった。この国に住む人たちの意識を変える為には、先ず自分が変わらなくてはならないと思った。一人静かにしているときに胸に込み上げて来る慈しみの心は、やはり祐子や亜希子、そしてこの数ヶ月間に接した人々に向いているものだった。不特定多数の人、生きとし生けるものや、大自然の恵みに対する感謝と慈愛の心が沸き上がって来ることは稀だった。賢は暫し瞑目し瞑想した。10分ほどして、携帯電話の音で意識が現実に戻った。モーツアルトのKV299だ。賢の好きな軽快な曲のはずだったが、飛行機の爆音のように感じられた。祐子が着メロにセットした曲だ。

「もしもし、賢さんですか？橘です」

「はい、賢です。どうしたのですか？」

「大事な話があるんです。いま、周りには何方もおられないですね」

「自分一人です」

「実は、所長から僕に当てた手紙が、事務所の冷蔵庫に入れておいた冷凍ピザトーストの袋の中から出てきたのです。あのピザは僕のものでし

たから、誰も手を付けなかったんです。昨日、あなたに電話した後で古い食料を処分したほうがいいと思って研究会の事務所に行ったのです。冷蔵庫の中を整理していて見付けたのです。賢さん、所長さんは自分の身に危険が迫っていることを感じていたようです。拉致される前に一切の書類をどこかに隠したようです。その場所は所長にだけしか分からない場所だと書いてあります。唯、自分にもしもの事があつたら、48529356という数字を繙けばその場所が分かると書いてあります。所長は自分がいなくなつたら、あなたとわたしに研究会を託すと書いてあります」

「橘さんが託されるのは当然だと思いますが、僕は研究会には全く貢献していませんし、研究会のメンバーについてもほとんど把握していませんから、遠慮した方がいいと思います。でも、研究会、特にあなたの支援はさせていただきたく思います」

「所長はあなたのことを大変買っていらっしゃいました。原智明とまともに話せるのはあなたしかいないと仰っていました。わたしもそう思います」

「いいえ、わたしにはそんな力はありません。ただ、直感で判断するだけです」

「いずれにしても、わたしは所長の搜索を続ける傍ら、書類の隠し場所について検討するつもりです。あなたも時間があつたら例の数字を検討してみてください」

「分かりました。ところで、所長さんはどこか南方の国の海岸に幽閉されている可能性がありますよ。何か心当たりはありませんか？」

「どうして分かるんですか？」

「透視のできる人がいて、その人が透視したら南国の海岸がイメージされたんです」

「そう言えば原智明が失踪して間も無い頃、2人のアジア系の外国人の男性がよく事務所に来ていました。わたしはまだ、そのころ原智明を探すことに夢中で彼らをあまり意識していなかったんですけど、所長が相手をしていました。その二人組も1週間ほど毎日のように来ていました

が、それから突然姿を見せなくなっただけです。所長が「この忙しいのに、五月蠅いっただけ」と言っていたのを覚えています。片言の日本語を話す外国人だったんで記憶に残っていますが、わたしの知る限りそれ以外に研究所を訪れた外国人は無かったと思います」

「そのことを警察に言いましたか？」

「ええ、所長の失踪事件の事情聴取に応じたとき、説明しておきました」

「警察に行ったとき、タイの海岸地域を調べるように誘導してくれませんか？」

「分かりました、やってみます。それでは」

賢はハンドバッグにプロジェクトノートと「おもいで」ノートを押し込んでから、藤代肇に電話し、プロジェクトの理念と目的について検討した内容を報告した。藤代は「分った。それでいいだろう」と言った。賢は藤代への電話を切ると、祐子に電話を掛けた。

「はい、祐子です」

「賢だ。祐子、これから出て来れるか？」

「うん、すぐに行くわ？」

「昨日言えばよかったけど、例の早瀬由美の物質化現象研究会に行きたいと思ってな。祐子に紹介して欲しいんだ」

「今日は平日だから研究会には誰も居ないと思うわよ」

「そうか、それじゃ、早瀬由美さんと付き合っていた人に会うだけでもいいんだけど」

「分かったわ。呼び出してみるわ。いずれにしても佐貫さんにコンタクトを取ってみるわ。それから折り返し電話するわ」

「わかった、頼むぞ」

祐子から電話が掛かって来たのは10分ほど経ってからだった。

「わたしよ。佐貫さんに会えるわ。10時にJR新宿南口の改札を出た所で待ってるわ」

「そうか、ありがとう。1時間後だな。じゃそこで会おう」

「それだけ？」

「祐子、お前にだけ話したいこともあるしな」

「うん、じゃ待ってる」

祐子は10時10分前に新宿駅に着いた。相変わらず人の海である。祐子は黄色のニットのセーターにグリーンのスカートを履き、白いウールのコートを着ている。じっとしていると、道路を吹き抜ける風に身震いを覚えるような冷え込んだ日だった。10時少し前に賢が黒いコートに身を包んで現れた。賢は紺の背広に黄土色地に濃いブラウンのチェックの入ったネクタイを締めている。南口の改札を出るとすぐに祐子の姿が目飛び込んできた。それは不思議な感覚だった。大勢の人たちが行き交う中で祐子の姿だけが目に飛び込んできたのだ。

「やあ、待ったか？」

「あなた、背広姿似合うわ」

そう言うなり、祐子は賢の左手に自分の右手を絡めて、賢を引くように人の流れに乗って歩き始めた。

「どこに行くんだ？佐貫さんは？」

「11時に喫茶店で待ち合わせることにしたのよ。あなた、わたしに二人だけの話があるんでしょう。ふふふ」

「ああ、祐子と決めておかなければならないことがあるんだ」

「そこの角のレストランに入ろうか？」

「うん、朝食も食ってないしな」

ふたりは大通りを下った角にあるレストランに入った。店の中はそれほど広くはなかったが、天井に点々と吊り下げられているランタン風の照明でヨーロッパのパブのような雰囲気を演出したレストランだった。あまり愛想のよくない20歳前後の小柄なウエイトレスに案内されて、2人掛けの比較的狭いテーブル席に着いた。ウエイトレスが水の入った2つのグラスとメニューを持って来た。ふたりはメニューをテーブルの上に広げて最初の列を指さしながらマルゲリータピザとコーヒー2杯を頼んだ。ウエイトレスはただ、「はい」とだけ言って立ち去った。

「ふたりだけの話って何？」

「うん、プロジェクトのことだけど、おまえも参加したいって言うてらるう」

「うん、あなたと一緒に働きたいのよ」

「でな、おれのアシスタントにならないか？」

「わたし、そうしたいって答えたと思ったけど」

「それは聞いたけど、ビジネスで言うアシスタントのことを言っているんじゃないんだ、世話役のような、スポーツで言うマネジャーみたいなアシスタントだ」

「えっ、それって、女房になれってこと？」

「それに近いかな。これから俺はいろいろな人と会い、いろいろな場所に出掛け、様々な体験を積んで行くことになると思うんだ。その体験を、共有して欲しいんだ。そして、時には俺の分身となって欲しいんだ。例えば・・・」

「わたしはそれを望んでいるのよ。でも、あなたには亜希子さんもいるでしょ」

「勿論亜希子の事もあるが、彼女はこの現実世界から半分抜け出している。この世界が変化する時、彼女がいなくてはならない。彼女は必然なんだ。祐子、お前は俺が選択した女性だ。そしておれもお前に選択された男だ。だから、俺は活動を試みる時、いつもお前が横にいることを意識していきたい」

祐子の目が潤んで来た。その時ウエイトレスがピザとコーヒーを持って来た。祐子は自然を装って眼頭を軽く押さえた。

「わたしは朝食をいただいたのよ。コーヒーだけいただくわ」

「それでな、俺が出張する時は可能な限りお前を同伴して行きたいと思うんだ」

「嬉しい。でも、そんなこと可能かしら。周りが反発するんじゃないかしら」

「だから、今日、そのことを宣言しておこうかと思ってな。お前の意見も聞いておきたくて。反感を買わないようにするにはどうしたらいいか相談しようと思ってな」

「会社の中では、暫くは離れていた方がいいように思うわ。同じプロジェクトの中で、わたしは他の人と同じようにある部分の担当になるの。

努力してあなたに接近して行くわ。その方が自分の為にもなると思うのよ」

「それはなかなか難しいぞ。だけどまあ、祐子がそう望むなら暫くはそうしていた方がいいかもしれないな」

ふたりは10時45分にレストランを出た。佐貫との待ち合わせ場所はそこからさほど遠くない路地裏の喫茶店だった。賢は祐子の後に附いて喫茶店に入った。入り口には御影石の衝立があり、その奥にテーブルが並べられていた。サラリーマン、OL風の客、新聞を読んでいる中年の男性がいずれも一人でコーヒーを前に黙って座っていたが、誰もふたりを意識しなかった。祐子は奥の4人掛けのテーブル向かった。佐貫はまだ来ていないようだった。ふたりが席に着くと直ぐウエイトレスがやって来て注文を聞いた。ふたりともホットコーヒーを注文した。店内の雰囲気はやや陰気な感じがした。音を立てるものが何もない。衝立の横から背広を着た中年の男性が現れた。祐子は立ち上がり軽く右手を挙げ合図した。佐貫はふたりの近くまでやって来た。賢も立って頭を下げた。「初めまして、内観と申します。今日は無理なお願いを致しまして申し訳ありませんでした」

「佐貫と申します。祐子さんに是非と言われて伺いました。早瀬由美さんの事ですね」

挨拶を交わすと銘々腰を降ろした。

「はい、現在わたくしは失踪という現象の謎を解明する為に、昨年発生した一連の失踪事件を調べておりまして、その内のいくつかの失踪事件については、その失踪の起こった条件のようなものが分かって来ました。しかし、失踪事件の内でも早瀬由美さんの件については理解できないことが多くて、彼女との接点がおありのあなたからは是非お話を伺いたいと思っております」

「どうして、失踪事件の謎を解明したいのですか？」

「実はわたくし自身が、何度か失踪状態になっているのです。自分としてはそういう状態になったという意識は無いのですが、他の人から見るとそのような状態だったようなのです。少なくとも2度それが起きたの

です。自分が陥っていた状態を理解する為にも、失踪現象を解明したいのです」

「そうなんですか？あなたがそういうことを追求されているのですから、わたしたちの研究会の目的とも重なります。今度一度我々の研究会に顔を出してみませんか？」

「はい、わたくしも是非伺わせていただきたいと思ったのですが、平日は開催されないと伺いまして・・・いずれにしても、一度会の方に伺いたいと思います。その節はよろしくお願い致します」

「仲間にも紹介したいと思いますから、こちらこそよろしくお願い致します。もう少し詳しくお話を伺いたいと思いますがそれは研究会にいらった時ということにして、今日は早瀬由美さんの話をさせていただきます」

「よろしくお願い致します」

「ところで、何からお話したらよろしいでしょうか？」

「はい、先ず、早瀬由美さんがなぜ物質化現象研究会に入会したかということからお話しいただきたいのですが」

「分かりました。自分の知っている限りでは、早瀬由美さんの入会の目的は、何か超能力的な力で物を出現させるというようなことではなく、誰かを自分の前に出現させたかっように見受けられます。わたしは彼女に好意を持っていましたから、何度か一緒にお茶を飲んだり食事をしたりしましたが、そんな時でも彼女の心の中にはいつも誰か別の人が居たように思えてなりません。わたしが交際を申し込んだ時も、ただ微笑みだけで肯定も否定もしませんでした。ですから、わたしとしても、まるで暖簾に腕押しでそれ以上接近できなかったのです。彼女はいつも一人で居るのが好きなようでした。あれだけの美人ですから随分いろいろな男性に言い寄られたようですが、誰に対してもわたしに対したのと同じような態度なので、その内誰も積極的に近付かなくなりました。一度、彼女に直接「なぜ物質化現象に興味があるのか」と聞いてみたことがあるのです。そうしたら「わたし、ある人に会いたいです。その人が現れて来るのを待っているのです」って言うでしょう。わ

たしはぞっとして、背筋が冷たくなりました。彼女降霊会にも入っていたでしょう。ですから、死んだ人を生き返らせようとでも考えているのかと思ったのです。でも、その後の彼女の様子からそうではなさそうだと思うようになりました。早瀬由美さんは心の中に描いた人間が出現して来ることを望んでいたようなのです。実際何らかの方法でその人に会えると思っていたようです。それで降霊会のような所にも出入りしてその可能性を探していたんだと思います」

「それについては、ここにいる祐子さんからも説明してもらいましたが、今のご説明でわたくしなりに理解できたように思います。でも、なぜ彼女は浄蓮の滝に行ったのでしょうか？そしてそこで失踪してしまった」

「そこがどうしても分からないところです。彼女が失踪してからわたしは何度か浄蓮の滝に行ってみました。失踪時の気候条件や、磁気の状態なんかを調べたりしたんです。でも、失踪を裏付ける様なデータは何も得られませんでした。彼女はあそこが好きだったようです。失踪前に何度か行っているのです。以前浄蓮の滝の旅行案内に載っていた滝の写真をじっと見つめていて、涙ぐんでいたことがあるのです。その姿を見て、わたしが「一緒に行こうか」って言ったら、急に怖い顔になって「駄目」と言われました。何か涙を誘うような思い出でもあるのでしょうか」

「早瀬由美さんは自分の見た夢の話なんかをしていませんか？」

「一度そんな話をしていたことがあります。確か・・・「昨日、夢で恋人に逢ったのよ」って言っていたことがあります。わたしは若い女性が見る普通の夢の様な気がして、特に気にも留めませんでしたけど・・・そうだ、夢と言えば彼女、「わたしは、自分の好きな夢を見られるのよ。でもそれはわたしの知っているものだけですけど」って言っていたことがあります。夢も記憶に関係あるのでしょうかね」

「ありがとうございます。大分参考になりました。でも、やはり浄蓮の滝とは結び付きませんか」

「ええ」

その時、祐子が言った。

「早瀬由美さん、幽体離脱で浄蓮の滝に行ってたのかしら？」



賢が応えて言った。

「そうかも知れない。どうも過去世の記憶が彼女をあそこに惹き付けているような気がするな。彼女がどうしても忘れ去ることのできない出来事がある所で起きたんじゃないかって気がする・・・佐貫さん、早瀬由美さんからそんな話を聞いたことはありませんか？」

「いいえ、わたしはそれほど彼女のことを深く知っている訳ではありませんから」

それから暫くの間、3人は早瀬由美について話合い、12時少し前に賢達は佐貫と分かれた。賢と祐子はふたりで静かに過ごしたいと思った。そして言い合わせたようにそのまま新宿御苑に向かった。御苑の中は落ち着いた雰囲気、ふたりだけの時間を過ごすには恰好の場所だった。人も疎らで、梅や桜の頃になればきっと家族連れで賑わうであろう芝生の上にも、僅か4、5人の子供達がボールを蹴って遊んでいるだけだった。紅葉の時期も過ぎた今の季節は、目に飛び込んで来る鮮やかな色はない。ここが副都心かと思わせるほど落ち着いた感じがする。ふたりは寄り添って池の畔を歩いた。暫くは言葉を交わすこともなく、ただゆっくりと歩を進めた。賢は祐子の肩を抱いて歩いた。

「プロジェクトの仕事をね、始めてしまったらね、こんな風にふたり切りでのんびりできる時間はなくなってしまうのね」

賢は軽く頷いたが、返事はしなかった。

「あなたが、わたしの手の届かないずっと遠くに行ってしまうような気がしてとっても寂しいの。今こうして居ても何かとっても悲しくなってきたら。わたしはね、本当はあなたと結婚してふたりで生きてゆきたいの・・・」

「祐子、今夜は一緒に居よう」

「・・・うん」

祐子は空しい様な感情が少し和らいだと感じた。ふたりはベンチに腰掛けて緑の残っている木立に視線を投げた。目に映る木々は、手入れされてはいるが自然の生体だった。その木々に重い空が覆い被さっていた。祐子は賢の肩に頭を凭れかけてじっとしていた。百舌がけたたましく鳴

きながら飛んで来て枯れ木に止まり、そして又飛び立った。

「祐子、一人の時は瞑想をしろよ、内側に向かって。いつか自分の中心に辿り着くよ。そしたら永遠に一緒に居られる。そこに至れば寂しさなんかはない。時間も空間も無くなる。いつも喜びの中に居られる」

「わかったわ、そうしてみる」

ふたりは2時半過ぎに公園を出た。そこから早瀬由美の家に向かった。由美の家は四谷の住宅街にあった。それほど大きな家ではなかったが、2階建てで玄関の前に小さな庭があり、高さ3メートルほどの松が門の脇に植えられている。庭はよく手入れされていた。石段を3段上がって呼び鈴を鳴らすと母親が出て来た。家には母親しか居ないようだった。早瀬由美の家には祐子が一度訪問していたので、母親は親しげに祐子に向かって話し掛けた。是非家に上がるように言われたがふたりは遠慮した。賢は自己紹介をし、明日浄蓮の滝に出掛けることを説明した。それから失踪前の由美の様子を尋ねた。失踪の当日も由美に特に変わったところは無かったが、いつもより嬉しそうにしていたとのことだった。母親は奥の部屋に入って行って、1枚の写真を手にして戻って来た。その写真は失踪する2月ほど前に由美が浄蓮の滝で滝壺を背景にして写した写真とのことだった。落ちる滝の水が今にも由美を飲み込んでしまいそうに見える。遠近感が掴めず、滝と由美が解け合っているように見える。由美は細身で美しく、身体全体に妖艶な雰囲気漂わせていた。母親はその写真を賢に渡した。ふたりは地下鉄四谷三丁目の駅に向かう途中でイタリアンレストランに寄った。祐子が空腹を訴えた訳ではなかった。賢が祐子の空腹を気遣ったのだった。食事を済ませて駅に入ったのは5時15分を少し過ぎた頃だった。ふたりは丸ノ内線に乗り、次の赤坂見附駅で降りてそこで別れた。祐子は銀座線の乗換口に向かった。賢は化粧室に寄って身繕いを直し、約束の10分前に笹亭の入り口を潜った。前回藤代肇と会った時より緊張感を覚えた。賢は出迎えた女将にコートを預け、前回と同じ奥座敷の部屋に通された。ライトアップされた内庭は冬の寒さを感じさせない。部屋には既に男性ひとり、女性ひとりが藤代肇と向き合って席に着いていた。二人ともスーツ姿だった。賢は

予想に反し一人が女性であることに驚いた。男性は40歳前後で中肉中背だった。目は細く鋭かったが、顔立ちはそれほど美形ではなく平凡な感じに見えた。女性はやや丸顔で目は大きかったが、鼻はやや低めで飛び抜けた美人ではない。まだ童顔で可愛らしい印象を受けた。年齢は35歳前後だと賢は思った。二人は一瞬賢の方を見たが、すぐに視線を藤代の肩付近に戻した。明らかに緊張していることが分かる。賢は藤代に向かって頭を下げ、そして二人に軽く会釈した。

「お待たせして申し訳ありませんでした」

「いや、我々も今来たばかりだ。まあ座りたまえ」

女将が挨拶をして立ち去ってから藤代が言った。

「内観さん、先ずふたりを紹介しよう。今回、君のサポートを担当してくれるふたりだ。こちらが企画部の第1企画課長楠木康秀君、当社の事業企画を任せたら右に出る者はいない。君のアシスタントという位置付けだ。こちらは田辺梓君、当社の研究所の第1研究室室長だ。仕事の処理能力は天下一品だ。見掛けとは違って体力もある。未だに独身でビジネス一筋に生きている。同様に、君のアシスタントという位置付けだ。ふたりとも当社でも筆頭に出る優秀な課長だ。4月までに3人の関係を確立してプロジェクトの実行計画を策定して欲しい。4月1日付で3人をプロジェクトの中核に据える。君がプロジェクトのリーダー、この二人がサブリーダーで、社内での位置付けは君が次長ランク、この二人が部長ランクとすることにした。つまり、社長のわたしの直下のプロジェクトなので当然そういう位置付けになる。楠木君は国大の経済学部大学院を修了している。業務能力はさることながら人間関係を作ったり、対外交渉をしたりするのに秀でている。当初は企画面、人的面、財務的面を担当してもらおう。田辺君は西大の理学部大学院を修了している。バイオ関係の論文で医学博士号を持っている。彼女には技術面、業務面、それに内観さんの女房役としてマネジャー的なことを担当してもらおう。女房役と言っても勿論企業での話で私的なことは含まない。云わば秘書のような役割とでも言おうか。当面はふたりとも部長待遇で業務を遂行してもらおう」

賢の頭の中を祐子のことが過った。田辺という女性にアサインされた業務は祐子が最も欲していた職である。祐子は自力で接近して来ると言っていたが、賢の臉にこのことを知って失望する祐子の姿が浮かんだ。

「次ぎに内観さんについて紹介しよう」

藤代は一旦賢に視線を向けてから、楠木と田辺の方に向き直って言った。

「彼は現在は当社の人間ではない。最近幾つかの私的な出来事を通じて、彼の人間性と能力を知った。君たちふたりも今回のプロジェクトが特殊なプロジェクトであることを承知していると思う。今までの通念で業務の遂行を行ったのでは、到底このプロジェクトを成功させることはできない。それは、最終的に指向している目標のビジョンが、今までの常識的な概念では確立できない為だ。だからと言って社会通念をいきなり破壊することは許されないし、そう簡単に変えることもできない。このプロジェクトでは社会通念を動かすことも企画する必要がある。残念ながらそれができる人材は限られている。わたしは内観さんにその可能性の高さを見たのだ。当社の社員の中には、知識、学力、業務経験などで内観さんを凌ぐ者は大勢いる。しかし、彼は世界の構造への洞察、社会と人間への洞察、記憶力と判断力、宇宙原理への探求心、そして今回のプロジェクトに不可欠な人間への普遍的な慈悲の心—これらを持ち合わせている。いずれ分かると思うが、内観さんは少し前までWE C社の営業課長をしていた。従って業務経験はあるのだが、君たちの所属する様な大きな組織ではなかったから、スケールの大きな取引の経験はあまりない。それを君たちの力で補って欲しい。内観さんには1月1日付けで当社に入社してもらい、当日付で社長付きになってもらう。現在彼には手掛けていることがある為、当面はそちらの業務と当社の業務とを両立させてもらう。まあ、50/50だな。その間は内観さんにはわたし直属の部長という位置付けでいてもらう。内観さんは理念を出す。楠木君と田辺君はそれを実行する。そういう位置付けだ。それでは先ず内観さんから自己紹介と抱負を述べてもらおう」

賢は藤代に頭を下げてから、楠木と田辺の方を向いて頭を下げた。

「わたくしは内観賢と申します。このたび藤代社長からプロジェクトリ

リーダーになるよう委嘱を受け、微力ながら全力で目的の達成に向けてプロジェクトを推進することを誓わせていただきました。藤代社長がわたくしを信頼していただいていることに深く感謝し、不転の決意でこのプロジェクトに取り組みたいと思います。このプロジェクトは巨大な国家プロジェクトを構成する重要プロジェクトだと聞いております。わたくしはこのプロジェクトが完了するまで、身命を賭して遂行を図ります。このプロジェクトの目的は「日本人の意識変革」です。わたくしは「人と人との結びつきを強め、物質偏重から精神性重視の日本に変革する」ことをこのプロジェクトのミッションに据えたいと思います。これを推し進めると必ず、社内の現行業務を担当する各部門から始まり、対外的には特に製造業主体の事業展開をしている企業から反発を受けることが想定されます。しかし、一旦プロジェクトの理念が開示されれば、必ずや多くの企業が精神性の向上をその企業理念に加えてくると考えます。それは否定できないものだからです。このプロジェクトの理念は「愛と慈悲に満ちた国を再構築する」ということにしたいと思います。現在の一般的企業理念とあまりにもかけ離れている為、暫くはミッションのみを前面に出して進め、機が熟したら理念を開示していきたいと思えます。今後プロジェクトの推進に関しては全て協議して進めることにしたいと思えます。プロジェクトについて現時点で考えている内容は以上ですが、わたくし自身について少々紹介しておきたいと思えます。わたくしはフェニックス大学の理学部を卒業しました。帰国後WE C社に就職し、企画営業を10年間勤めました。この7月に昨年起きた7件の失踪事件を調査するべく退社し、現在まで調査を続けています。そんな折り、藤代社長にお目に掛かり、このプロジェクトのリーダーにご推薦いただいた次第です。これから長い間のプロジェクト活動、志を共にしていただきたく、よろしく願い致します」

賢が頭を下げると直ぐに、楠木と田辺は「よろしく願い致します」と言って深々と頭を下げた。

「それでは、楠木君、自己紹介したまえ」

「はい社長。わたくしは企画部の第1企画課長職を任されております楠

木康秀と申します。この度はプロジェクトのサブリーダーという重要ポストを拝命し、大変緊張しております。今度の4月で入社11年になります。その間、経理部、業務部、企画部と移動致しました。現在は企画部の第1課で当社の事業企画を担当しております。この国家プロジェクトが非常に難しいプロジェクトであることが分かり、誰に白羽の矢が立つかと思っで見守っておりました。自分を抜擢していただき、身の引き締まる思いが致します。社長より過分のお言葉をいただき恐縮千万です。リーダーの方針に則り、逡巡することなく業務を遂行して行きたいと思えます。わたくしは6年前に結婚し現在2児の父親でして、所沢に住んでおります。趣味はゴルフです。どうぞよろしくお願い致します」

楠木が頭を下げると、賢も「よろしくお願い致します」と言って頭を下げた。藤代が言った。

「田辺君、君の番だ」

「はい、社長。わたくしは研究所の第1研究室長を任されております田辺梓と申します。この度は国家プロジェクト傘下のインフラプロジェクトのサブリーダーを拝命し、大変恐縮致しております。わたくしのような若輩者がこのような大プロジェクトのサブリーダーの様な重責を果たせるかどうか、大変心配です。わたくしはXX年4月に卒業し、この会社に入社させていただきました。当初技術部に配属されましたが、2年後研究所に移籍になり、現在は研究所の第1研究室で当社新規事業の要素研究を担当させていただいております。わたくしはこれまで仕事一途に生きて参りました。まだ独身です。現在鶯谷のマンションに一人住まっています。実家は北海道の滝川で、父母はそこで酪農を営んでおります。これからは社長のご指示に従い、プロジェクトのスムーズな推進を図ると共にプロジェクトの世話役としてリーダーを支えて行きたいと思えます。よろしくお願い致します」

田辺が頭を下げると賢も直に頭を下げた。楠木がテーブルの下からA4のコピーを取り出して、藤代、賢、田辺の順に配った。藤代が言った。

「これからプロジェクトを運用するに当たって、最低限のルールを決めた。先ずこの内容を租借して頭に入れて欲しい。楠木君、読んでくれた

まえ」

「はい、社長。それでは読ませていただきます。

1. このプロジェクトは国家プロジェクト「瑞穂プロジェクト」の傘下の「インフラプロジェクト」（以下本プロジェクトと呼ぶ）である。瑞穂プロジェクトは全体を統制する企画グループの管下の本プロジェクトおよびシステムプロジェクト、リソースプロジェクト、財務プロジェクト、運営プロジェクトより構成され、相互に連携を図りつつミッションを遂行するものとする。
2. 本プロジェクトは社会に対する貢献を主目的とし、プロジェクト活動の中に反社会的な活動があってはならず、その結果は国民に精神的向上と希望をもたらすものでなくてはならない。
3. 本プロジェクトのリーダー（以下リーダーと呼ぶ）は自身が重要と認める事項の決裁に関する権利を有する。
4. リーダーは本プロジェクトに参加するメンバーの人事権を掌握する。
5. リーダーは重要事項の決済に際しては、事前に最高責任者の承認を得るものとする。
6. 本プロジェクトのコントロールグループとして10人で構成する専任のステアリングチームを置く。
7. 本プロジェクトは全ての事項を、担当部門の責任者の協議により進める。
8. 本プロジェクト内の協議による決定事項の拒否権は社長およびリーダーの2者のみに帰属する。
9. 本プロジェクトの遂行および結果に影響を与える恐れのある重大な瑕疵が生じた場合は、直ちにその瑕疵を取り除く対策を実施するものとする。
10. 本プロジェクトを故意に遅滞、混乱、転倒させる意図が明らかになった場合は、その瑕疵の原因をもたらした者を本プロジェクトのメンバーから除外し、しかるべき処置を講ずるものとする。
11. 本プロジェクトはプロフィットを主目的とせず、プロジェクト理念の達成を優先する。

12. 本プロジェクトは前記11項を条件として、企業としてのプロフィット達成を図らなければならない。

13. 本プロジェクトへの投資は、経営会議の決議を受けて、最高責任者の承認の上、決定する。

14. 本プロジェクトの開始はXX年4月1日とし、目的事項完遂の時点において、総理大臣の承認を持ってプロジェクトの完了とする。

15. 本プロジェクトの最高責任者は藤代肇とし、リーダーは内観賢とする。

以上で読誦を終わります」

「そういうことだ。問題があれば、プロジェクト内で検討して改めて行きなさい。細目は楠木君がまとめてくれ給え。まあ、堅苦しい話はここまでにしよう。これからは肩の力を抜いて気楽に話そう」

藤代が両手を打って合図をした。すぐにビールと前菜が運ばれて来た。仲居がそれぞれのグラスにビールを注ぎ終わると、藤代の音頭で乾杯をした。

「これから、君たちは家族のようにいつも協力して活動するようになる。分からないことや知っておきたいことがあったら、お互いに質問しておいた方がいいぞ」

三人は「はい」と返事をした。遠慮がちに楠木が言った。

「内観さん、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「はい、何でも聞いてください」

「先ほどおっしゃっていた失踪事件の調査というのは、どういうことをされているのでしょうか？お差し支え無ければ教えていただきたいのですが」

「はい。最近の地球の変化は、誰でも感じていることと思います。わたくしは地球の変化と同時に人間自身も変化していると感じています。昨年、連続して失踪事件が発生しました。失踪事件そのものは以前から年間4000件ほど発生しているのですが、昨年の事件はこれまでの事件とどこかが違うと感じました。今、誰かがこの問題に取り組まなくてはならないとの思いから、調査に乗り出した訳です。この調査はこ



れまでの常識を持って追求したのでは埒が明きません。既成概念を全て拭い去って調査をする必要があったのです。そういう意味で警察や検察当局とは異なった視点で調査を開始しました。集中して調べる為に会社も辞めました。それから、実際事件の発生した現場に行って調査を始めたのです。その結果これまでに3件の失踪者を帰還に導くことができました。今もこの調査を続けていて来年の3月末までに一区切り付けようと考えています」

「今世間で騒がれている失踪者の帰還に、内観さんが関与していたのですか？驚きました。そのことはそれほど重要なことなんですか？」

「自分はそう考えています。先ほど言った帰還というのは、どこかに幽閉されていたのを救い出したというようなことではないのです。人の意識によって、消滅、帰還が起きるということが分かったのです。実際、あの3人の人たちも、意識の作用で帰還させることができたのです」

「本当ですか？それが事実だとすると、これは大変なことですね」

「楠木君、わたしが内観さんにこのプロジェクトのリーダーになっていただくようお願いした理由の一つにそのことがあるんだよ」

田辺梓が大きな目を更に大きくして聞いていたが、靨（えくぼ）を浮かべながら話した。いや、話し始めると靨が出来ると言った方が正しいかもしれない。

「あの一、その現象というのは量子バイロケーションとか量子テレポテーションと関係あるのでしょうか？」

「田辺さんはその辺りのことに詳しいのですか？わたくしは量子の現象には精通していませんので、量子の性質に基づいては説明できないのですが、それに似たようなことが人間という巨大な個体についても起きるようになってきているということなのです。何と言ったらいいか、まるでDNAの活動とRNAの活動が従来の役割の枠を拡大したように、連鎖的に周囲の場全体に対して作用するような状態になってきているとも言ったらいいのかも知れません」

田辺はにっこり笑った。話が楽しくなってきたと思った。藤代肇が言った。

「ここで話していることは、他の者に話してはならないぞ。今度のプロジェクトが今の話に関係しているからだ。一寸考えると分かると思うが、もしこのことが公になると、利害関係の絡んだ組織がどんなことを仕掛けてくるか分からない。例えば人の意識を用いて誰かを消滅させようとしたり、この現象を悪用して利益を上げようとするかもしれない。だからこの話ではできるだけ内密に、しかし事実をねじ曲げないで対応してほしい」

「わたくしも藤代社長と同じ考えです。例えば、実際わたくしが失踪者の帰還に関与したことが明らかになれば、いろいろな組織や個人からの干渉が起きると思われるからです。現に、事件の解決を報じたテレビ局に対して問い合わせが殺到していると聞きます」

楠木が聞いた。

「内観さん、個人的なことを伺ってもよろしいでしょうか？」

「構いません。どうぞ」

「失礼ですが、結婚されていますか？」

「いいえ。独身です」

田辺が聞いた。

「彼女はいらっしゃいますか？」

「はい、二人います」

楠木と田辺は顔を見合わせて目を丸くした。藤代は声を出して笑った。

「わっはっは・・・その二人はわたしの娘達だよ」

田辺が言った。

「社長、お子様はお嬢様お一人だと伺っておりますが？」

「うん、最近一人養女にしたんだ。そのふたりが、ふたりとも内観さんにぞっこんなんだよ。困ったもんだ。わっはっはっは・・・だけど、これはここだけの話だぞ。絶対に口外してはいかんぞ」

楠木が聞いた。

「それでは、内観さんは二人のお嬢様のどちらかと結婚なさることを希望されているのでしょうか？」

「いいえ、結婚するつもりはありません」

「社長、それでもよろしいのですか？わたくしはそういう男女関係は・・・」

楠木は少し興奮したように言い掛けて、場を感じて言葉を濁した。田辺は顔色を変えなかった。

「今までは企業活動というものは当然のことながら社会のルールに則って行わなければならなかった。人々の考え方や判断もほとんど社会の常識や規範に則って為されてきた。だから君たちのような受け止め方をするのは当然だ。これがいわゆる社会のルールで常識や既成概念というものだ。一人の男性が二人の女性を同時に愛してはいけないという謂わばタブーのような規範があり、法律すらある。今回のプロジェクトは現実社会のルールの中でそういった規範を超えなくてはならないのだ。理解できるか？」

「は、はい、社長。まだわたくしには腑に落ちませんが、これから、プロジェクトの真意を理解できるように励みます」

「楠木君、田辺君、君たちの様なエリートには特に今までの学問の基盤があるし、その基盤に基づいて物事を判断している。それは当然のことだし、会社として利益を出す為にはそうでなくては困る。しかし、今度のプロジェクトで指向している方向は全くその逆だ。だからできるだけ早く規範や常識の呪縛から抜け出して、現実社会のルールの中でどのようにプロジェクトを進めたらいいか検討してくれたまえ。現在の業務を行いながらの取組になるから少しきついかも知れないが、君たちの能力はずば抜けているからそれも可能だと思っている。頑張ってくれ」  
ふたりは姿勢を糺して「はい、社長」と返事をした。タイミングを計ったように次々に料理が運ばれて来た。今度は田辺が質問した。

「内観さん、趣味はおありですか？」

「いいえ、特にはありませんが何に対しても興味はあります」

「わたくしは旅行が趣味です。今までいろいろなところに行きました。内観さんはアメリカに留学していらっしやったのでしょうか。アメリカのどちらにいらしたのですか？」

「フェニックスです。正確にはスコッツデールですが」

「アリゾナですね。わたしは学生の時、グランドキャニオンからモニュメントバレーを旅行したことがあるんです。グランドキャニオンではロッジに2泊もしたんですよ。初めてリムに立ったとき、あの雄大さに足が竦（すく）んでしまったほどです。内観さんはあちらにはいらっしやったことはおありで？」

「はい、あの一帯は好きでした。特にペトリファイドフォレストが好きでしたね。あのペインテッドデザートの色が好きでした。日本人の友人が居ましたのでよく一緒にセドナを経由してフラッグスタフに入り、そこからグランドキャニオンにハイキングに行ってあの辺りを廻りました。それにあの周辺はインディアン居住区になっていて、原住民の方とも良く付き合いました」

「メテオクレータにも行かれたのですか？」

「ええ、3回くらい行っています。崩れそうで崩れない赤褐色の自然の造形が大好きです」

「君たち、気が合いそうだな。さあさあ、料理にも手を付けてくれたまえ」

楠木が聞いた。

「内観さん、現在どちらにお住まいですか？」

「江東区のアパートに住んでいます」

「お一人で？」

「ええ、わたしは一人っ子なんです」

「ご両親はどうされていますか？」

「両親はアメリカに住んで居ます。父は医師で、アメリカ人の母と結婚してわたしが誕生しました。父はアメリカの永住権を取って、今アリゾナの大病院で働いています。わたしは、父が出生後にすぐに日本大使館に対して国籍留保の届出をしたので日米両方の国籍を持っています」

「そうですか。わたしは、先ほど申し上げましたように、結婚して二人の子供がいます。上は男子でこの春小学校に入ります。下はまだ3歳の娘です。昨年所沢にマイホームを建てました。結婚当初はいろいろ夢を見ていましたが、今は現実生活の中でどうやって趣味の時間を確保しよ

うかと必死です。ゴルフが好きなんです、休日に1日中出掛けているのを妻がなかなか許しません。両親は九州の佐賀県に住んでいます。もう75歳を超えていますから、そろそろ介護のことも考えなくてはと思っています。兄もいるんですが、やはり両親とは同居していません。今千葉県成田に住んでいます」

楠木は賢が家族のことを話したので、自分も話さなければならぬと感じたようだった。田辺も家族の話始めた。

「わたしは現在鷲谷のマンションに独りで住んでいます。下に妹が一人います。わたしとは5歳(いつつ)離れていてつい最近まで一緒に住んでいたんですが、今年の春に結婚して今は日吉のアパートに住んでいます。まだ、両親が元気に頑張っていますので心配ありませんが、いずれはわたしたち姉妹のどちらかが両親の面倒を見ることにしています」  
少しして藤代が3人を見回して言った。

「来年になったら早々に、プロジェクトの主要メンバー全員に集まってもらって、顔合わせをしよう。楠木君、田辺君、準備してくれないか？」  
ふたりは同時に「はい、社長」と応えた。それから暫くの間4人は食卓を挟んで歓談した。帰り掛けに楠木と田辺が賢に名刺を渡しながら事前に会って相談したいと言った。3人は3日後の午後6時に鷲谷のレストランで会うことに決めた。田辺の帰宅を気遣って賢が提案した。田辺は、そんな配慮は不要だと言い張ったが賢は譲らなかった。田辺は自分が女性として扱われることを好まないのだと賢は思った。

賢がアパートに帰ったのは8時40分過ぎだった。部屋に入ると賢は背広をクローゼットに掛け、窮屈なネクタイを取り去った。背広のポケットから札入れを出し、さっき受け取った名刺を2枚取り出した。田辺の名刺の裏には携帯電話の番号と、自分のマンションの住所、電話番号が手書きで書いてある。楠木の名刺には表の電話番号の下に携帯電話の番号が書き込まれていた。賢はその名刺の内容を手帳に書き写し、名刺を書棚の引き出しに収めた。そして下着を脱ぐとすぐにシャワーを浴びた。冷たい水から始まったシャワーは直ぐにほろ酔い加減を冷ましてくれた。バスルームから出て身体を拭き寝室のベッドに身を投げると、急に

眠気が襲ってきた。賢は腰にタオルを巻き付けたままの姿で眠りに落ちてしまった。30分ほどして携帯電話の着メロの音で目が覚めた。亜希子からだった。賢は部屋に暖房も入れていなかったのに気付いた。身体が冷たくなっていた。ぶるぶると震えがきた。電話を耳から外してくさめを2つした。

「もしもし」

「賢さん、大丈夫ですか？お風邪を召したのですか？」

「いや、シャワーを浴びて裸のまま寝入ってしまったんだ」

「それはいけませんわ。直ぐに服を着てください。一度電話を切ります」  
賢は直ぐに衣類を身に着け、エアコンの電源を入れてから亜希子の携帯に電話した。

「もしもし、服を着ましたか？」

「うん。どうしたんだ？」

「はい、さっき父が帰って来ました。いよいよ、プロジェクトが始まるのですね。わたくし興奮してしまって、電話をしなくてはいられなくなってしまいました。如何でしたか？」

「お父さんから聞かなかったのか？」

「父はわたくしたちの前では、仕事に関係した話はほとんど致しません。会社の方やあなたがお見えになったときだけは別ですけれど」

「そうか、会社の方二人に会ったのだけど、二人とも立派な経歴の持ち主でエリートコースに行く課長だったよ。一人は男性、一人は女性だった。これからはプロジェクトはこの二人と二人三脚で進めなくてはならないことになる」

「あなた、女性の方はどんな方ですか？」

「俺より一つ年上の人だ。研究所の室長をしているキャリアウーマンのようだ。男性の方は36歳のやり手のようだ。企画課長をしている」

「あなた、女性の方は美人ですか？」

「うん、チャーミングな感じの人だったよ」

「\*\*\*\*\*」

「もしもし、亜希子今日はどうしていた？」

「はい、お花のおけいこに行っていました。また発表会があるのです」

「そうか、一度亜希子の生けた花を見てみたいな」

「えっ！本当ですか？是非今度の発表会にいらしてください。わたくしも出品致しますから」

「そうか、分かった。で、いつやるんだ？」

「1週間後です。後で詳しくお話しします」

「うん、それじゃな」

「あっ、待ってください。まだ切らないでください……今夜、そちらにおじゃましても……いいかしら？」

「今日はだめだ。又にしよう」

「はい……わかりました、お休みなさい」

賢は翌日の支度を始めた。リュックサックに3冊のノートを入れ、2日分の着替えのシャツと下着を詰め込んだ。リュックサックをソファの横に置くとテレビの電源を入れた。10時を過ぎていた。ニュースをやっている局は無かった。賢は直ぐにテレビを切った。その時、電話が鳴った。祐子からだった。

「祐子、どうした、遅いじゃないか」

「あなた……行けなくなっちゃった」

涙声だった。

「どうして？」

「わたしが出掛けようとしたら、お父様が帰っていらっしまったの。少し歓談して一旦部屋に戻って、誰も居なくなってから出掛けようと人の気配が無くなるのを待っていたの。そしたら、亜希子さんと二人、一緒にお父様に呼ばれてしまったのよ。お父様がおっしまったの。今日からあなたは会社の人間になったし、大変なプロジェクトを背負うんだから今までのように迷惑を掛けてはいけないって。特に夜は駄目だって。それを聞いたから今日は出掛けられないわ。これからはあまり自由に会えなくなっちゃうのかしら？」

祐子の声は悲しげだった。

「おかしいな、さっき亜希子から電話があったけど、そんなこと言って

なかったぞ」

「ついさっき、二人が呼ばれたの。改めて言われて二人とも身が引き締まったわ。これからはどうやってあなたの処に行こうかしら」

「祐子、明日から湯ヶ島に行くから後から追い掛けて来いよ。プロジェクトが開始されたら、自分でもどこが拠点になるか分からない。今を大切にしよう。この間一緒に泊まった河合楼を予約してある。夕方には旅館に着くようにしろよ。おれは昼間一人で浄蓮の滝に行ってみる」

「わかったわ。それじゃ、明日絶対に行くわ。あなた、愛してる。お休みなさい」

「おれもだよ。おやすみ」

## 湯ヶ島

賢は朝早くマンションを出た。前回は祐子と一緒に出掛けた。今祐子は近くに居ない。夜が明けているのに空は灰色一色に塗られていて、時々海の方角から吹いて来る風に思わずコートの襟を立てずにはいられなかった。早朝は踊り子号が走っていなかった。6時56分の新幹線に乗った。三島には8時丁度に着いた。それから駿豆線に乗り換えて修善寺に向かった。窓際の席に座ったが、電車は次第に通勤客と通学の学生達で混雑して来た。学生達が大きな声で話をしている。喧噪の中に居ても、昨日祐子に会えなかったことで心の中は寂然としていた。電話で祐子と言った寂しいという感情が自分にも沸き上がってきた。賢は目を閉じて内側に向かった。暗い海の中を潜ってゆくような感覚に満たされた。どこまでも暗い闇が続いた。しかし恐怖心は湧いて来ない。闇の中を深く進んで行った。際限なく続く闇だ。一筋の灯りも見えなかった。賢は車掌に肩を揺すられて目を開けた。周りには誰一人居なかった。既に電車は修善寺駅に着いていた。賢は車掌に謝って急いで柵からリュックを取ると電車を降りた。バス停に停車している昭和の森会館行きのバスに飛び乗った。バスは直ぐに出発した。浄蓮の滝に着いたのは9時半を回った頃だった。時間が十分にある。賢は既に店を開いているスタンドスナ



ックでホットコーヒーを頼んだ。年配の女性が受け皿に載せたコーヒーカップを差し出しながら言った。

「お客さん、湯ヶ島にお泊まりで？」

「いいえ、今東京から来たところです」

「随分お早いですね。これからあちこち廻るんですか？」

「いいえ、ずっとここに居ます」

「浄蓮の滝がお好きなんですね」

「少し、調べたいことがありまして」

「へえ、何をお調べになるんですか？」

「ここで行方不明になった人について調べようと思ひまして」

「ああ、1年前のことですか？・・・ここは、昔から人が行方不明になるって言い伝えがあるんですよ。お客さん、女郎蜘蛛の話知ってますか？」

「ええ、知っています」

「それがね、この滝には女郎蜘蛛に殺された樵夫の後の話もあるんですよ。時々、この辺りじゃ、神隠しがあるんですよ。それが女郎蜘蛛の所為じゃないかって言う人もいるんですよ」

賢はコーヒーを飲み終えると、店番の女性に礼を言って滝壺に向かった。曇り空は一層黒ずんで賢の背中に重く押し掛かって来る。木陰を下る石段の坂道は、賢の意識を次第に日常から切り離していった。

「いらっしゃってくださったのですね」

賢はその声に後ろを振り向いた。しかし誰も居ない。他の人たちの会話だろうと思った。

「分かったのですね。お待ちしております」

透き通るような女性の声だった。賢はまた振り返ったが、やはり誰も居ない。もしやと思ったがそのまま滝壺まで降りて行った。売店が開いて、この前訪れた時に店番をしていた老人が奥の椅子に腰掛けていた。賢の姿を見ると老人は会釈した。賢も軽く頭を下げて階段を下り、そのまま滝壺に向かった。滝壺を望む手すりから身を乗り出すように一人の女性が立っている。賢はハッとしたが、そのまま女性に近づいて声を掛

けた。

「おはようございます。朝早くから、旅行でいらっしゃったのですか？」  
女性は賢の方に振り返った。前回ここで出会った女性だった。賢は意外に冷静な自分を意識していた。女性は肌の透けるような美しい顔に微笑みを浮かべて応えた。

「いいえ賢さん、あなたをお待ちしていました」

その言葉で、賢にはそれが早瀬由美だと覚った。早瀬由美はグレーの地に鮮やかな赤と黄の原色のサイケデリックな模様の入った半袖のワンピースを着ていた。

「早瀬由美さんでしょう。あなたはずっと失踪していましたが、現実世界に戻れたのですか？」

賢はいきなり突飛な質問をした自分に驚きながらも、早瀬由美の次の言葉を待った。

「賢さん、周りをご覧になってください。気付きませんか？」

確かに落ちて来る滝の水、岩場と、鬱蒼とした木々、そしてジョウレンシダが目に入るがどこか違和感があった。なぜかくっきり見える様な気がする。滝壺の奥に見えるジョウレンシダが揺れていた。そこに意識を持ってゆくと、まるでハイビジョンの映像を見るように羊歯の葉の一枚一枚と孢子まではっきり分かった。孢子がどんどん作られている様子が見える。驚いて売店の方を振り向くと、そこに並べてある土産物の袋が全て分かる。きょうぎの箱の中に入った山葵漬けの色も分かった。舌にその味が感じられ、ツーンと鼻に来る辛さで涙が出てきた。

「えっ、これは？」

「あなたが創った世界よ。こちらの方が真実に近いのよ」

「しかし、時間が経過しているように思うけど」

「時間もあなたが創っているのよ。わたし、あなたがここにいらっしゃることを知って心が躍りました。あなたの居る世界の時間で5000年近く待っていたのですよ。といっても、こちら側の世界ではほんの僅かな時間ですけど」

「僕を待っていたと言うと？」

「あなたの意識がこの場を認識できるようになるのをお待ちしていたのです。元々、あなたはもっと広い認識力をお持ちの方です。でも現世の既成概念に雁字搦めに縛られていましたから、そこから抜け出すことができなかつたのです。今、漸くあなたを縛っていた縄が解け始めてきたのです。まだ完全には解けていないのですが」

「僕の考えていた実在の世界は、時間も空間も無い世界でしたが……こうしてみると自分の考えが間違えていたのかと思ってしまいます」

「いいえ、あなたの考えは誤っていません。この世界は実在の世界ではありません。あなたがいつも考えている投影された世界なのです。現実の世界と違うのは、この世界ではあなたの意識の持ち方で、全てが変わることです。あなたがそう望めばわたしもたちどころに消えてしまいます。時間も無くなります」

「と言うと、この世界は僕の意識の世界だということですか？」

「はい。正確に言うとなあなたの意識が作り出している世界です。あなたがわたしに会いにいらしてくださったでしょう。だからわたしが居るのです。でも、わたしは自分で現実界に戻ることはできません。それは、あなたもご存じのように、今までわたしを現実界に引き戻す力がわたしに対して直接働かなかつたことと、わたし自身が戻ろうとしなかつたからです。その二つの力が一つになって作用しなくてはならないことをあなたは既にご存じです。わたしが貴方と共に生きたいと思い、あなたがわたしを受け入れてくだされば、わたしは現実界に戻れます。わたしはあなたをお待ちしていました」

「本当にあなたは現実界に戻る意志がありますか？もしあなたの力がわたしの意志の力より強くて、あなたに現実界に戻ろうとする意志が無ければ、あなたがわたしと意識を一体化することでわたしが現実界に戻れなくなってしまうでしょう」

「そう、その通りです。でも、わたしはあなたが現実界に連れて戻ってくれるのでしたら喜んで附いて行きます」

「そうですか。それじゃ意識を一体化して現実界に戻りましょう」

「いいんですね？わたしを受け入れてくださるのですね？」

「僕には一生共に生きることにしている女性が二人います。そのことを理解できますか？」

「そのことは、わたしの生とは関係ありません。わたしはあなたと共に生きることができればそれでいいのです。あなたが何人の女性を愛していようと関係ありません。あなたもご存じでしょう。元々あなたもわたしもないのですから」

「分かりました。まずは僕と一緒に現実界に戻ってください。それから、現実界での生き方を決めましょう」

ふたりは滝壺の柵の前で向き合って瞑目した。賢は意識を早瀬由美に集中しようとした。早瀬由美も意識を賢に向けて集中させた。ふたりはやがて現実に戻ろうと強く意志を働かせた。しかし賢はなぜか意識を早瀬由美に集中できなかった。どうしても祐子の姿が浮き上がって来てしまった。暫くして早瀬由美が言った。

「駄目です。あなたの意識の中に他の女性が入って来ます」

「はい、先ほど言った女性の一人です。今日の夕方、宿で会うことになっているのです」

「その女性への意識を遠ざけなくてはうまくいきません。そう、こうしてみましよう。ここでわたしを抱きしめてください。今のあなたの意識ではあなたの腕がわたしの身体を通り抜けてしまうでしょう。でも、ご自分の身体は個体として感じられます。あなたはわたしを抱きしめて、現実のものにしてください。わたしだけに集中的に意識を働かせてみてください」

賢は由美に近づいて肩を抱こうとしたが、由美の言うように手が由美の肩を通り抜けてしまった。賢が目を凝らすと目の前の由美の美しい顔が微笑んだ。賢は思わず由美を抱きしめた。今度は由美の身体を自分の胸に少し感じた。徐々に強く抱きしめてゆくと、由美の胸の膨らみが意識されてきて、次第に由美への愛おしさが増してきた。髪から微かに洗い立てのシャンプーの香りがする。賢は思わず由美に口づけをした。由美の唇は冷たく、水を含んでいるように濡れていた。由美は目を瞑り賢の求めに応じた。その時、子供の騒がしい声が聞こえてきた。

「ほらほら、キスしてる！」

「ほんとだ、エッチだな！」

5人の男の子がふたりが抱き合っている方を指さしてワイワイ騒いでいる。賢は由美をそっと離して両肩に手を置いた。今度ははっきりと由美の身体を感じた。

「戻ったのか？」

「はい、戻りました。わたしの手を握っててください。暫くの間握っていて」

賢は由美が現実の存在を定着させようとしているのが分かった。子供達が又わいわい言っている。

「おい、今度は手を握ったぞ！ほら見てみろ」

「ほんとだ！又キスするぞ」

賢は「もうキスしないよ」と心で応えた。賢が子供達の方を見て微笑むと、子供達はたじろいでガヤガヤ騒ぎ立てながら階段の方に向かって駆け出した。

「わたし、お腹が空きました」

賢は自分のコートを脱いで由美の肩に掛け、再び左手で由美の右手を握って歩き始めた。売店の前を通り過ぎる時、並べてある山葵漬けに目が止まった。じっと凝視してみたがきょうぎ箱の中は見えず、まして味も感じられなかった。さっき経験した世界の方がこの世界より、ずっとリアルで自由度が高いと思った。

「由美さん、どうして僕が来ることが分かったのですか？」

「ここで、あなたにお会いしたでしょう。それからはずっとあなたの意識を見ていました。他の誰に対しても、自分の意識が働きませんが、あなたに対しては別です。だから、あなたがどこにいらっしゃるか、どういう状態にあるかも分かっていました。あなたがこちらに来ようと思われた時、わたしは喜びに打ち震えました。あなたの意識と一体化するチャンスはあなたにお会いした時しかないと思っていましたから」

「由美さん、どこか食事のできるところに行きましょう。そこでゆっくりお話ししましょう」

賢は由美と手を繋いだまま石段を上がった。途中で由美の息使いが荒くなってきた。賢は曲がり角の踊り場で立ち止まった。

「少し休みましょう」

「ごめんなさい。わたし、お腹が空いて力が出なくて」

「息が戻ったら、この上のレストランで食事をしましょう」

賢は由美の肩に手を廻した。先ほどはそれほど感じなかったが、コートの上から触れただけでも随分痩せていると感じた。由美が賢の目を見つめ、手を握り締めた。握っている手の腕はそれほど細くなってはいないようだった。賢は「衰弱している訳ではなさそうだ」と思った。

「食事をすれば大丈夫だな。これから暫く栄養のあるものを食べて、体力を取り戻そう」

「はい、わたしを支えてください」

甘えるように自分の目を見つめる由美が、賢には愛らしく感じられた。由美の息が整ってきた頃を見計らい、賢は再び由美の右手を握り締めてゆっくり歩き始めた。石段を登り切るとふたりは滝への降り口にある土産物店を兼ねたレストランに入った。レストランの中は暖房が効いていた。由美はコートを脱ぐと礼を言って賢に返した。

「由美さん、カツ丼とか力の付きそうなものを食べたらどう？」

「はい、でもわたし、動物性の食べ物はいただかないの。野菜カレーがあるようなのでそれをいただきます」

土産物店の店員を兼ねたウエイトレスが来たので、賢は野菜カレーを2つ頼んだ。まだ11時を少し回ったばかりだったが食事は直ぐに運ばれて来た。賢は由美を気遣って食事をしている姿を見つめた。由美は賢の視線を気にする様子も見せず食事に集中した。嬉しそうに微笑みながらスプーンを口に運んでいる。由美はあっという間にカレーを平らげ、水を口にしてからテーブルの上のナプキンで口元を拭いた。賢も追い掛けるように食事を食べ終えて水を一口飲んだ。

「どう、少しは元気になった？」

「はい、ありがとうございます。力が湧いて来たような気がします。わたし何も持っていないんです。どうしたらいいかしら？」

「大丈夫だよ。僕に任せておいて。今日は身体を休めたほうがいいよ、今日は湯ヶ島の温泉に泊まって温泉に浸かって、明日東京に戻ったらどう？」

「わたし、ハンドバッグも何もかも無くしてしまったみたいなんです」「君の持っていたものは、もしかしたら警察が保管しているかも知れないよ。だけど、きっと大騒ぎになるから、今日は警察には届け出ないで明日の朝にしたらどうかな」

「はい、そうします」

その時、賢の携帯電話が鳴った。祐子からだった。

「あなた、今日も行けなくなったわ。亜希子さんも行きたいって言い出したの。それで、ふたりとも行くのを取り止めることにしたの。だって、お父様に釘を刺されたでしょう。これからは気楽には会えないわ」賢はがっかりした。久しぶりに祐子と過ごす時間を楽しみにしていた。祐子の声からも寂しさが伝わって来た。

「分かった。祐子、みやげを買って帰るよ。何がいい？」

「おみやげなんていらないわ。それより早く帰って来て」

「分かった。そう気落ちするな、直ぐに会えるから。それじゃ」

電話を掛けている賢の姿をじっと見つめていた早瀬由美が、賢が電話を切るとぼつりと言った。

「今のが彼女ね」

「うん」

「でも、あなたがわたしのことを話した女性は彼女ではないわね」

賢はやはり由美が気付いていたのだと思った。

「由美さん、怖いこと言っただろう。暫くの間あの言葉に縛られていたんだ。でも、途中であの言葉に縛られることには意味が無いと気付いた。丁度その時、亜希子というもう一人の女性が僕が不注意に置いておいた君のノートを読んでしまったんだ。僕が見せた訳じゃないんだけど、結果的には約束を破ってしまった。ごめん」

「いいのよ。この前お会いした時、わたしはやっとのことであなたを見付けたので、あなたの意識をわたしから離したくなかったの。あの時は、

あなたはどのようにいいか分からなかったでしょう。だから、あなたがこの世界の仕組みをある程度思い出すまで待つことにしたの。あなたにここに帰って来てわたしを救って欲しかったの。わたしはずーっと待っていたのよ」

「さっきの電話は祐子という人だけど、彼女が泊まる予定だったから、今なら、部屋を確保できるはずだ。僕の泊まっている旅館でいいかな？」

「はい、でもわたし、お金が……」

「僕に任せておけばいいよ。それより、君の着替えが必要だな。このままじゃ風邪を引いちゃうよ。これからどこか衣類を販売している店に行って調達しよう」

賢は先ず河合楼に電話を掛けた。ホテルの受付は、たった今、祐子からキャンセルの電話を受けたと言った。賢は直ぐに由美の部屋を確保することができた。ふたりは旅行案内の窓口に行って相談することにした。窓口の女性は修善寺まで行った方がいいと言った。ふたりは思い切ってバスに乗って修善寺まで戻った。バスでは奥の二人掛けの席に座った。

「わたし自分が失踪状態にあることを知っていました」

「それは貴重な話だ。実は、僕も2度失踪した経験があるんだけど、その時のことは全く記憶に無いんだ。この世界に帰還した時、時計は失踪した時の時刻を指していたから、失踪状態にある時は時間も空間もなくなるんだって思っていたんだ。その中では自分を認識できる意識も無いのだと思っていた。僕以外に帰還した失踪者が4人いるけど、ひとりを除いて、みんな失踪しているときの記憶は全く無いんだ。そのひとは、夢を見ていたようなことを言っていたけど、現実の時間とはかけ離れていた……その人を除いて僕ら4人にとっては時間も失踪した時のまま止まっていたようだ」

「訓練すれば、意識を保ったままの状態ですべての空間に入れます。それが、この世界では失踪状態に見えるのでしょうか」

「その時は時間がどんな風に経過するのか」

「この世界から見ると時間は経過していませんが、自分の意識が変化を認識しているといった感じです。ですから、あちらの世界では



時間経過があるような形になっていました。何となく浦島太郎みたいですね」

由美はにっこり微笑んで、目をくりくりさせながら話した。賢は由美にあどけなさを感じその意外性に驚いた。由美が囁くように言った。

「わたしが5000年待ったって言った訳を聞かないのですか？」

「いや、一番聞きたいことだから後の楽しみに残してあるんだ」

賢は由美が所属していた降霊会や物質化現象研究会について聞いた。由美は「それはあなたを探す為よ」と言った。賢は肩透かしを食らったような気がした。由美は二つの会について賢に細かく説明した。その話の中には特に目新しい話は無かったが、祐子の言っていた幽体離脱で浄蓮の滝に来たことがあるという話を聞いた時には、祐子の鋭い勘に改めて驚いた。賢は嬉しかった。由美が、皆が想像していたようなおどろおどろしい世界の存在でなかったことでその喜びは一入だった。バスが修善寺駅に着くと、ふたりは駅前の洋服店に入った。賢は由美をコート売り場に連れて行った。由美は一番値段の安い朱色のウールのコートを選んだ。賢はそのコートを買うと、値札を取って直ぐに由美が羽織るのを手伝った。それから由美に3万円渡して、必要なものを買うように言った。由美は下着売り場に入ると暫くして、袋を下げて出て来た。賢の所まで来ると2万を渡して、1万円借りたと言った。賢はその残りの2万円も持っているように言って由美に戻した。そして、陳列されている婦人用のベージュの札入れを一つ買って渡した。由美は手に持っていた金を財布に入れた。ふたりは買い物済ますと直ぐにまたバスに乗った。由美は新しいコートの暖かさを身に沁みて感じていた。腕を上げて何度もコートを見ている。賢が言った。

「もっといいコートを買えばよかったのに」

「これが一番気に入りました。なにより、賢さんに買っていただいたというだけで、わたし嬉しくて、嬉しくて」

ふたりは河合楼の前でバスを降りた。バスの中のデジタル時計は3時22分を示していた。ふたりはホテルにチェックインした。チェックインカウンター的女性は、前回祐子とふたりで宿泊した時と同じ女性だった。

彼女は賢のことを覚えていないようだった。一通りの説明を受けるとふたりは案内を断り、鍵を受け取って3階にある部屋に向かった。賢は祐子と共に歩いた廊下のことを思い出した。それほど月日経っている訳ではなかったが、とても懐かしい感情が湧き起こってきた。初めに賢の部屋があった。その隣が由美の部屋だった。賢は扉の前に佇んで由美に言った。

「疲れているだろう。身体が温まるから。先ずお風呂に入った方がいいね」

「はい、そうします。お風呂から上がったら、賢さんのお部屋に伺います」

「のんびりするといいよ。後でいろいろ話をしよう。話したいこと一杯あるからね」

賢は直ぐに浴衣に着替えて浴室に向かった。由美は部屋に入ると、ふぁっと暖かい風を受け、真綿で全身が包み込まれるような感じを覚えた。由美は先ず用意されている浴衣を確かめてから財布を金庫に入れ、クローゼットを開いてみた。流石に老舗旅館だけある。クローゼットの中まで掃除が行き届いていて真新しい衣紋掛けが3本と洋服ブラシが用意されている。由美は窓際に寄って外を覗いてみた。向こう側には川を挟んで樹木に囲まれた古い造りの別棟があり、建物の向こうには山が迫っている。2つの川の流れがここで合流してひとつになる狩野川の基点である。自然の中に居ることを実感させる造りになっていた。由美は窓のカーテンを引いてクローゼットの前に行くと、身に付けているものを全て取り去って全裸になった。そして、そのまま洗面所の鏡の前に行き全身を見つめた。1年以上の間意識は継続していたが時間の経過は感じなかった。それが不思議だった。失踪から戻っても身体の表面には何の変化も無かった。身体の線も以前と変わらないと思った。さっき賢に触れられた肩も自分では失踪前より痩せたようには感じなかった。由美は裸のまま洗面用の石鹸を使って脱いだ下着を簡単に洗いタオル掛けに干した。それから直ぐクローゼットの所に戻ると素肌に浴衣を着て帯を締めた。木綿の感触が肌に心地よさを感じさせる。脱いだワンピースを衣

紋掛けに下げクローゼットを締めると、さっき買った下着をビニール袋から取り出しバスタオルの間に挟んで部屋を出た。大浴場の暖簾を潜り引き戸を開けると、浴室はきちんと清掃されていて清々しい。誰も居なかった。由美は浴衣を脱いで籠に入れ、タオルから下着を取り出して浴衣の下に忍ばせた。ハンドタオルをビニール袋から取り出し浴場の扉を開いた。壁もタイルの床もきれいに掃除が行き届いている。由美はまず自分の身体を丁寧に流した。特に汚れの付いていそうな部分は注意して何度も流してからゆっくり湯船に入った。湯船は広く、ひとりで入るのが勿体ないと思う程だった。掛け流しの湯が作る細波に向けて由美が作った波が向かって行く。由美は身体を湯に沈めて一息吐いた。全身に喜びの感情が漲ってきて身体が打ち震えるようだった。目から涙が流れた。涙は止めどなく流れ出して来た。やっと賢に辿り着いた。そして賢に優しく受け入れられた。気の遠くなるように長い年月がかかったと思った。何故それが分かるのか自分でも不思議だった。

賢は誰も居ない湯船に浸かって、まだ終わっていない一日を朝まで逆に辿ってみた。浄蓮の滝に降りて行くときに聞こえたのは由美の声だということが分かった。今日の自分がまるで、予め敷かれた線路の上をトロッコを操って進んでいるような気がして来た。「5000年近く待っていたのですよ・・・」由美の言葉が余韻となって頭に残っている。賢は暫く瞑想してから上がった。部屋に戻って、トラベルバッグから3冊のノートとペンを取り出し、まず失踪事件調査ノートの由美のページを開き今日の出来事を逐次記入した。次に「おもいで」ノートを取り出した。どうして由美がノートだけを人に託すことができたのか不思議に思いながらページを捲ってみた。由美の帰還を実現してみると1ページ目の「おもいで」という表題が悠久の広がりを示してくるようだった。賢は次のページを開いた。「おもいで」を綴った文章だ。まだ意味が分からない。由美に訪ねてみようと思った。

ああ

冬の雨のひとしづくにも似た、  
街の冷たい水のしたたりが、

わたしの魂を凍らせてゆく  
空は青、草は緑に、血の色は赤、  
水は透き通って、  
それでも、わたしの中を巡る  
彷徨える心は、  
わたしから離れ  
あなたを求め  
こなた、かなたを追いかける  
いまあなたに巡り逢い  
心は戻り  
わたしの内なる太陽は  
麗しき壱子を産み落とす  
あなたは幣を手に  
静かな鏡面に祈る  
水面にひと滴の涙が落ち  
波は無限に広がる  
辺り一面  
花が咲き乱れ、  
ふたたび時はながれはじめる  
ああ

その時ドアをノックする音がした。ドアを開けると浴衣姿の由美が立っていた。賢は由美の艶めかしさに圧倒された。どこからこの妖艶さが出てくるのかと思うほどだった。特に浴衣を淫らな感じに着崩している訳ではなかったが、胸元から首筋に掛けて女を感じさせる身体の線が見える。賢は由美をこのまま部屋に入れると自分を押さえることが難しいと思った。

「由美さん、下のレストランに行きませんか？」

「いいえ、賢さんのお部屋でお話ししたいと思います。あなたとふたり切りであなたにだけ聞いていただきたいのです」

賢は一瞬の躊躇を思い直して言った。

「そう、それじゃ中に入ってください。今あなたから預かったノートを読み返していたところです」

「それでは失礼致します」

由美はずっと部屋に入った。賢が座布団を用意すると由美は少し恥ずかしそうに腰を降ろした。その時部屋の電話が鳴った。フロントからだった。挨拶に来るとのことだった。電話を切って1分も経たない内に若い仲居の女性がドアをノックし「失礼します」と言って入って来た。賢は由美と向かい合った席に座っている。

「ようこそいらっしゃいました。先ほどお伺いしたのですがお客様がいらっしゃいませんでしたので、ご挨拶が遅れまして申し訳ありませんでした」

仲居はそう切り出すと、一通りの説明をしてから、最後にふたりを交互に見て言った。

「奥様、旦那様のお部屋でのご挨拶に変えさせていただきますとお部屋にお伺い致しませんがよろしいでしょうか？」

由美は少し顔を赤らめて言った。

「え、ええ、結構です。ありがとうございます」

由美はちらっと賢の方に視線を向けたが、賢と視線が合った瞬間顔一面に血が巡ってゆくのを感じた。仲居が出て行くと、賢は「会話を誰にも聞かれない」という由美の気持ちを気遣って立ち上がりドアをロックした。部屋に戻ると由美が盆の上に用意されているポットから急須に湯を注いで茶を入れていた。

「由美さん、あなたにはいろいろなことを伺いたいと思っています。分からないことが一杯あって」

「はい賢さん、わたし自身も自分のことで分からないことが沢山あります。あなたがわたしの所に来てくださって、わたしを救ってくださったということは、わたしの今までの悩みがすべて解消されることだと信じています。何でもお話しします。そしてわたしの全てを知っていただきたく思います」

賢は由美の大胆な言葉に押されたように応えた。

「は、はい・・・では先ず5000年間待ったということから話していただけますか？いきなり飛びすぎかな？」

「いいえ、そんなことはありません。でも少し長いお話になりますが、よろしいですか？」

「ええ、時間は十分ありますから」

「5000年という感覚はこの世界の感覚なんです。実在の世界では、5000年も1億年も1秒もみんな同じなんです。ただ、この世界から見ると一定のリズムを数えて時間を計算しますから、とてつもなく長い時間になってしまいます。5000年前と言うと、確か、日本では縄文時代です。わたしはそこからあなたを捜し求めていました。何故それが分かるかと言うと、一寸説明し難いのですが、わたしには生まれ変わった時の記憶が全て残っているんです。子供の頃わたしは、誰でも皆全ての生まれ変わりの記憶を持っていると思っていたのですが、次第に他の人たちはそれを忘れ去っているということが分かってきました。中学生の頃そのことを友達に話したのですが、馬鹿にされて意地悪をされたりしたのでそれからはこのことは誰にも話さないことにしました。5000年前まで、正確には4963年ですが、それまではあなたとわたしは一つだったのです。わたしたちは意識として存在していて、肉体に宿らない時は球体として存在していました。わたしたちとは別に動物的な肉体はありましたがいつもその中に居た訳ではありません。ただ人間の肉体を生かしておく為には、誰かがそれを占有してコントロールする必要があります。人間の肉体は非常に複雑な構造になっている為、ややもすると直ぐ狂ったような行動をして、長く生きることができなくなってしまいます。動物的な肉体には男性も女性もありました。わたしとあなたは時として男性の肉体に入り、また時として女性の肉体に入りました。わたしたちは生き通しで、生まれることも死ぬこともありませんでした。もっとも今も永遠に生き通しなのは変わらないのですが、大抵の人はそのことを忘れ去っています。わたしとあなたが離ればなれになってしまったのは、ある一つの出来事が原因でした。わたしたちが1卵性双生児として肉体に宿った時のことです。誕生の前にわたしたちが宿

ることにしたのは一体の男性の肉体のほうでした。それが意識を注入するとき、二つの肉体に同時に入ることになりました。誕生するまでは肉体が二つあることを意識しませんでした。ところが、誕生後二つの肉体の意識の方向が分かれてゆきました。一人は積極的な性格を持っていました。もう一人は内向的で受動的な性格でした。それでもわたしたちの意識は一つだったのですが、ふたりの間に一人の女性を巡って葛藤が起きてきました。わたしたちは一つの意識の中に自己矛盾を包含するようになってきました。二つの肉体の中で意識の分裂を起こしました。そう、精神分裂みたいなものです。そして、彼女を獲得する為に肉体的な闘争を繰り返し最終的にその女性に執着しました。その結果肉体が自分だという意識が強くなり、ふたりの男性がほぼ同時に肉体の死を迎えた時、二つの意識に分かれてしまいました。その時からわたしたちの意識の繋がりは切れてしまいました。やがてわたしは分離してしまったもう一方の意識—それがあなたなのですが—その意識を求めて彷徨うようになったのです。わたしは生まれ変わる度に女性として生きることになりました。あれ以降一度も男として生まれて来たことはありません。多分あなたも男性としてだけ生まれて来ていると思います。あの出来事からわたしは47回生まれ変わっています。あなたは、多分5、6回しか生まれ変わっていないと思います。最初の頃、わたしにはそのことが分かりませんでした。いくら探してもあなたに巡り逢えなかったのです。今回の人生で、わたしはやっとあなたの誕生に合わせて生まれて来ることができました。あなたが誕生してから大体3年後を狙って生まれるように意図しました。でも、さっきも言いましたが、生まれる前の世界には時間は無いので、こちらの世界の時間に照準を合わせるのが非常に難しく、46回の転生を経てやっとあなたの足跡を捉えることができたのです。意識の基底がずれてしまった者同士では、この世界にいる時しか離れてしまった意識を探ることができないからです。この世界では全く異なったレベルの意識の存在が混在していて、まるで海岸の石ころの様に犇めき合っているのです。だから、異なった意識の存在を探してふたりで互いの意識を同じ方向に向けることができるのは、この世界を置いて他

に無いのです。今生のあなたは生まれたばかりの頃何度か肉体から意識が離れたことがあり、わたしの意識でそれを認識できたのです。46回の人生ではいろいろなことがあったのですよ。あなたから離れていたの、わたしはどの人生も何かを求めて旅をしているような人生でした。初めの頃は自分が何を求めているのかも分かりませんでした。漸くそれがはっきりと分かるようになってきました。あなただったのです、わたしが求め続けたのは」

由美の目から涙が滝のように流れている。涙は流れ続けて浴衣の襟から胸元まで濡れてしまっている。賢は立ち上がって洗面所に行きハンドタオルを持って来て早瀬由美の横に座り、涙を拭いてあげてそれを由美に渡した。由美はそのハンドタオルで、襟もとから胸に掛けて濡れた浴衣を押さえるように拭きながら言った。

「わたし、嬉しくてもう胸が一杯です」

「僕にはまだ、その意識が沸き上がってきません。本当に僕があなたと分離したもう一方の意識なのでしょうか」

「あなたは、とても大きな、わたしよりもずっとずっと大きな意識をお持ちの方なのです。わたしはあなたの中に吸収されるような意識を感じているんです。きっと、実際はわたしが貴方から分離して行ったのだと思います」

「僕も、何故かは分かりませんが、由美さん、あなたのことがずっと気になっていました。この失踪事件の調査はあなたの失踪事件から始めました。5000年の話は僕なりに理解しました。ところで、どうして淨蓮の滝で失踪してしまう結果になったのですか？」

「わたしはあなたのことを何度も夢に見ました。勿論あなたのその姿が夢の中に顕れたわけではありませんが、先ほど言ったように魂の片割れとしての相手と再び一つになる夢を何度も見たのです。その夢は常に淨蓮の滝に結び付いていました。そこで自分の過去世を辿ってみたのです。そしたら、わたしのほとんどの転生がこの滝に関連していました。昔は滝（たる）と言われていましたが、確か10回目か11回目の転生で偶然滝（たる）の傍を通り掛ったあなたに遇ったのです。その時に味わっ



た衝撃的な意識の高揚ははっきり記憶に残っています。わたしは既に高齢になっていたのです。あなたはまだ若い青年でした。わたしの家は農家で貧しく、わたしの食費を維持することができなくなっていたのです。息子がわたしを滝（たる）の上に捨てたのです。勿論滝壺に投げ入れたのではないのですが、滝崖の岩の上に箆を敷いてそこにわたしを置き去りにしたのです。握り飯を3つ置いてゆきました。わたしは捨てられることを知っていましたが、息子のするままになっていました。捨てられることを受け入れるしかなかったのです。そこを通り掛ったのがあなたでした。あなたはわたしが捨てられていることを直感でお察しになりました。ご自分と一緒に生きてゆこうとおっしゃいました。わたしは足腰が弱くなっていましたので、直ぐに立ち上がりませんでした。あなたはわたしを背負われてご自分の家に連れて行ってくださいました。あなたの家も豊かではありませんでしたが、あなたはご自分の食べるのを削ってでも、わたしの食事を切らせないようにして養ってくださいました。よく、あなたがひもじさに耐えきれず、野に出て木の根を嚙っているのを盗み見てわたしは密かに涙を流したものです。あなたは樵夫をしていました。よく淨蓮の滝の近くに出掛けて行っては木を切って、それを売って生計を立てていたようです。そのほかキノコを採ったり、猪を捕まえたりしていました。よく働いていましたから実入りは十分あったと思うのですが、あなたは苦しんでいる人を見掛けると、折角手にしたものを全てその人に与えてしまっていました。ですからわたしに食べ物を与えるのが精一杯のようで、ご自分はあまり食べていないようでした。あなたには好きな方がおられたようでしたが、その方と添い遂げることもなくわたしが死ぬまでわたしの面倒を看ってくださいました。あまり食べ物を口にしなくてもあなたの身体は丈夫で、わたしは不思議でなりません。わたしは毫碌していたのでしょうか、胸が熱くなるのはあなたへの感謝の心からだと思っていました。そのあなたが、過去に自分と別れた意識をお持ちの方だと気付いたのは、今世でこれまでの過去世を省察している時なのです。今世は何としてでも貴方に巡り逢わなくてはならないと思っていましたから、わたしはあらゆる手段を用いて

自分の全ての過去世を振り返りました。どうして、あなたがそうだと分かったのかと言うと、心なのです。あなたに意識を集中すると、わたしは身体が震えて来て、胸が燃えるように熱くなってきて、あなたと一つになっていた時の記憶が蘇ってくるのです。もう一度別の過去世でもあなたにお逢いしています。その時も心が燃えるように熱かったのを思い出したのです。その時わたしは7、8歳の少女でした。あなたは50歳前後のどこか遠くに住んでいるお侍さんだったと思います。長い雨の日が続いた後の夏の暑い日の夕方です。わたしは久し振りに晴れ上がった日差しの下で友達と遊んでいたのですが、陽の光に照らされて輝いているとてもきれいな羊歯を見付けました。友達から離れてその羊歯の葉を取ろうと滝壺の方に手を翳していた時に、誤って滝壺に落ちてしまいました。友達はそれとも知らず、わたしが一人で家に帰ってしまったものと思い込んで急いで帰って行ってしまいました。わたしの家ではいつまで経ってもわたしが帰って来ないので、心配して近所の人に助けを求め、村中総出で捜索をしました。でも発見されませんでした。結局神隠しに遭ったということになったようなのです。後で知ったのですが、暫くして葬儀も行われました。わたしは2日間ほど意識を失って水嵩の増した川を流れていたようです。不思議なことに水も飲んでいませんでしたが、全く記憶を失っていました。随分川下で通り掛った一人の立派なお侍に助けられました。それがあなただったのです。あなたはまず河原で火を焚いてわたしの身体を暖めてくださいました。そしてご自分がお持ちの食事をわたしにくださいました。それから廻りの家々を訪れて心当たりがないかと聞いて廻ったのですが、誰もわたしのことを知りませんでした。あなたはわたしをご自分の家にお連れになり、養女になさってください育ててくださいました。わたしはあなたをお父上と呼びました。あなたの優しさは、心に描くと涙が流れるほど暖かいものでした。わたしはあなたのことがいつも心にあり、あなたのことを考えただけで心が燃えるように熱くなりました。でもそれは父親への尊敬と愛情の為だと思っていました。わたしが19歳の時あなたが先に逝ってしまわれました。わたしはあなたの跡を追ってあの滝に身を投げて死にました。今も

あなたのことを思うと心が燃えるように熱くなってきます。この胸の熱さが直接身体に表れたらわたしはきっと燃え尽きてしまうのではないのでしょうか。他の人からどんなに優しくしていただいても、あるいは過去世で他の人に愛されて、そして抱かれても心はそんな状態になりませんでした。わたしがあなたと巡り逢ったのは過去世ではその2回限りですが、いずれも浄蓮の滝に端を発しているのです。ですからわたしは、浄蓮の滝に行けばいつか必ずあなたにお逢いすることができると思っていました。女郎蜘蛛の話は、後でこの地方に伝わる民話を自分の過去世での出来事と結び付けてみただけです」

由美の頬をまた涙が一筋伝わって流れた。湯上がりの顔を伝わる涙は、次第に由美の艶めかしさを可憐なイメージに塗り替えていった。

「そうだったんだ。僕は自分の過去世を見ようとしたことがないから分からなかったけど、そんなことがあったのか。でも、君の書いた「おもいで」の詩、あれは君の心を詠ったものなんじゃない？」

「わたしの心の葛藤と、あなたに巡り逢いそして結ばれることへの希望を詠った詩です。水はあの進る浄蓮の滝の水のことです。その水がいつもわたしの身体を巡っているのです。あなたを慕う心です。失ってしまったあなたとの繋がりを求めて心が彷徨っていたのです。そして、あなたにお逢いできた時のことを思い描きました。わたしの心の中には全てを生み出す太陽があり、そしてあなたの心と一つになって、新しい命を生み出すのです。あなたはそれを祝福します。そして5000年前から今まで、わたしの中で止まっていた時間が再び流れるようになるのです」

「なるほど、漸く意味が分かりました。この前あなたに逢った時、あなたは中年の女性にこのノートを手渡しているけど、あなた自身の力で一旦この世界に戻ったということなのですか？その後僕の前にも姿を現しましたね。でもその時は僕の方があなたの居る場に移ったように思いますが」

「浄蓮の滝の滝壺付近にはこの世界と実在界を繋ぐ出入り口のような領域があるのです。あるDNAの配列をした人が近付くと、実在界の方に移行してしまうようなのです。特に誰かの意識が働くと移行が起き易

いようです。あの時あそこに現れた中年の女性にも多少その傾向がありましたので、わたしが無理に引き込み実在界でのノートを渡して頼んだのです。あの女性はほとんど現実界の意識でいましたから、わたしが力を抜いたら直ぐに元に戻りました。その時あのノートもあの方の意識の中で物質化したのです」

「なるほど、そういうことでしたか。僕の場合はあの女性よりもっとあなたの言う実在界に移行し易い体質を持っているので、容易にあなたに会うことができたのですね」

「そうです。あなたの姿はぼんやりですが、実在界からも捉えることが出来ます。あなたは時々実在界に現れるのです。わたしが貴方に意識を集中しているとき、何度もわたしの前に現れたことがあります。ほとんどの場合姿を現すだけでご自分の意識は働かせておられません。あなたが現れるときは、大抵あなたがどなたかを呼んでいる時のようです。そういう時は、あなたが迷走してはいけないので、わたしの意識をあなたから逸らすようにしていました。あなたの外見はあなたが決めているようです。今のお姿もとても素敵ですが、過去世でお会いしたときのお姿を思うとわたしの身体は溶けてしまいそうになります。身体が震えて止まらないのです。まるであなたの波動にわたしの身体が共振するような感じですよ」

「僕の意識が実在界に移行していたのは、多分失踪した方を呼び戻している時だと思います。あなたの言う実在界には無数の意識が交錯していると思いますが、あなたの思いやりのある対応で、これまで僕は一切の干渉を受けずに失踪者を帰還に導くことができました。感謝します」

「わたしからあなたを拝見することはできますが、あなたはもっと違う次元におられるようなのです。ですから、どれほど多くの意識があなたの方に向かっても、あなたと同調することはかなり難しいと思います。大抵の方は実在界ではあなたを見ることすらできないと思います」

「それはどういうことですか？」

「意識の出す波動のことです。あなたの波動は、他の成分を含まない純粋な波動です。大抵の方はいろいろな成分を含んでいますから、あなた

の波動に同調できません」

「いろいろな成分とは、高調波のようなものですか」

「振動で言う高調波のことですか？そう、それもあるでしょうが、振動の周波数が変化したり衝撃波の様な形の波を含んでいたり、いろいろです」

「由美さん、詳しいですね」

「これは、過去世で体験したことを現代の科学に当て嵌めてみて分かってきたことです」

「そのために、降霊会や物質化現象研究会に入っていたんだ」

「すべて、あなたに会う為の手段だったの」

「あの詩の次のページに書いてある13の節はどういう意味ですか？僕は自分なりにその意味を右側に書き付けてみたんだけど」

そう言いながら賢はテーブルの上に広げてある「おもいで」ノートに手を伸ばしページを繰った。

「それはわたしがよく見る夢に顕れた情景を言葉で表現したものです。ビジョンが顕れる度に並べて書き付けていったのです。そしたら、何となく宇宙創成から終焉までを表現した詩のようになりました。その一つ一つの節に、わたしの心に浮かんだイメージを付け加えていったのです。いくら考えてみてもわたしにはその一つ一つに明確な意味を見つけることができませんでした。そこで、あなたにそれを託したのです。もし、あなたが5000年前にわたしと離れた意識でしたら、必ずわたしの抱いたイメージを理解するはずだと思ったのです。そして、そのあなたの解釈については誰にも話して欲しくなかったのです。わたしとあなただけが共有する意識にしたかったのです」

「ぼくとあなたが嘗て一つで、光の無い透明な無限の広がりの中から意識が芽生えたということでしょうか？そして、そこに7つ命を生み出した。僕はあなたの詩の節を、こんな風に理解したのです。どう思いますか？」

由美は賢の差し出したノートを手にとって見つめた。初めは静かに観ていたが、そのうち目を大きく見開き真剣に読み始めた。由美はノートを

賢の方に戻しながら、テーブルの縁を回って賢の右側に移った。そして一旦賢に返したノートを覗き込むように見て言った。

「そう、そうなの！そうよ、わたしもそんな風に感じていたんだけど表現できなかったの」

賢は由美が自分に近付いて来たのを意識しなかった。

「そうか、ということは君の意識と僕の意識は同じ方向を向いている可能性があるんだな」

「間違いないわ！あなたよ。わたし、もう胸が一杯になって……」  
そう言うと由美はノートを閉じ、磨り膝をして賢の横に来た。賢は由美の座る場所を空けるように体をずらした。由美は賢の目を見つめて言った。

「いま、昔のようにあなたと一つになりたい」

そう言いながら、由美は賢の右手を握り締めた。賢は由美の不意な動作に少し驚いたが、一呼吸おいて言った。

「由美さん、さっきも言いましたが、僕には今世を共に生きることになっている女性が二人居ます。その内の一人とは永遠に共に生きようと誓っています。ですから、あなたに対して……」

「そういうことではないのです。あなたはまだ、あなただけの個性で生きておられますもの。わたしはあなたの個性を超えてあなたの中に溶けて了いたいのです。そうなればわたしとあなたは区別が無くなります。肉体は二つに分かれたままですが、意識を一つにして、片方の肉体は大半の人たちがそうであるように意識から切り離し現在の規範の中で思考に基づいて生きるようにします。わたしが今入っている身体の方をそうします。そして、わたしとあなたは一つの意識として今のあなたの身体の中で生きるのです。他の人たちから見れば、今までのあなたであり、わたしです。お願いです。あなた、わたしを受け入れてくださいますか？今、……抱いて……いただけませんか？」

由美の思い切った言葉に、賢は意識を濁らせずに応えたかった。由美の持つ排他的でニガティブに感じるものを自分の中に取り込むことを拒むのは自分の理想とするところではないと思った。自分がどれだけ由美

の意識に支配されるか試してみたかった。賢が由美の肩に手を掛けると由美は目を瞑った。賢は暫く由美の顔を眺めていた。とても安らかな顔をしている。賢は静かに由美の額に口づけをした。それと同時に由美は目を開け身体を起こすと、賢をじっと見つめてかじり付いた。

「抱いてください」

賢は、由美を抱きしめながら言った。

「肉体的に一体にならなくても・・・由美さん、瞑想を通して一つになれるかどうか試してみよう」

「いや、いやです。抱いてください。わたしのすべてを受け入れて」

賢は由美がこの一瞬に自分の全てを賭けているのを覚った。由美の激しくなった鼓動が賢に伝わって来る。ふたりは必死に意識を統合しようと試みた。由美は賢の腕の中で身動きしなかった。賢は柔らかな由美の体を感じ、次第に血が沸き立ってきた。強く由美を抱きしめてそのまま畳の上に倒れ込んだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

賢は暫く由美の顔を眺めていた。とても安らかな顔をしている。賢は静かに由美の唇に口づけをした。唇に触れると由美は静かに目を開けた。そしてゆっくり身体を起こすと、賢にしがみついた。

「由美って呼んでください。もう一度あなたに抱かれて一つになりたいの」

賢は由美を強く抱きしめた。由美は再び目を瞑った。

・・・・・・・・・・・・・・・・

20分ほどして賢は由美を自分から引き離した。

「由美、もう一度、魂を融合させる方法を考えてみよう。このままこれ以上続けても無理だ。ふたりの意識の方向が一致していない。思考が働いているんだ。先ず自我を捨てて意識を純粋に保たなくては旨くない」

由美は頷いた。賢は由美の頭を優しく抱き寄せた。由美は両手を賢の背に廻し、しっかり抱き付いた。賢は由美を愛おしく思う気持ちが次第に高まっているのが分かった。

「はじめてなのか？」

由美は黙って頷いた。その目から涙が一滴流れ落ちた。賢は由美の頭を優しく抱き寄せた。

「由美、まだ自分の理想の相手が意識の中に根強く残っているだろう。それを捨て去って僕と向かい合わないと一つになれないよ。僕を理想の相手と思わないで・・・全ての思考を捨てるんだ」

「ええ、でも、あなたの胸に抱かれて、初めはとっても痛くて苦しかったけど、知らない内にその痛みが気持ちよくなってきて思考は消えていきました。喜びに打ち震えました。わたしは海に漂っているようでした。とっても気持ちよくて・・・このまま永遠にあなたの腕に抱かれていたい」

「\*\*\*\*\*」

賢は由美を抱き寄せてくちづけをした。由美は腕の力が抜けてだらりとなり身体を賢に凭れかけた。由美は目を閉じた。賢は由美を強く抱き締めた。由美は賢の背中で両手の指を組んだ。賢は由美に口づけをしながら中に入った。由美は賢に征服されていることに歓喜した。しかし、その感覚も次第に薄れ、意識全体に空が広がって来た。空は遙か彼方に霞んで見える水平線で海に接していた。空中に大きな火が顕れた。それが迫って来た。由美は自分の意識が海であることを感じた。火は勢いを強めながら迫って来た。その火に焼き尽くされるような感じを覚えたとき、火が自分の中に入って来た。そして海である自分が煮えたぎり、太陽と海が一体になった感覚を覚えた。静かな喜悅の海の中から再び新たな太陽が昇って来た。それがふたりから生み出された生命であることを意識した。ふたりの意識は融合して一つになった。賢は由美であり、由美は賢の感覚を同時に感じた。ふたりはおよそ2時間ほど結びついたまま抱き合っていた。ドアのノックの音で二人の意識が戻った。賢が由美を静かに離し、浴衣を身に付けてドアの所に行くと外から声がした。

「お食事の支度をさせていただきますでしょうか？」

「隣の部屋に二人分準備していただけますか？」

賢がドアを開けずに応えた。仲居は了解して去った。



ふたりは身繕いを整えた。賢には由美の喜びの感情が意識された。まだ一体感が残っている。

「由美ここにおいで」

「はい、わたし今あなたの感じることを感じることができます。この肉体を愛おしく思います」

「意識が解け合ったようだな」

「あなた、わたしのことを愛おしく感じていらっしゃるわね。わたしとあなたの愛している方と同じように感じていらっしゃるでしょう。あなたの意識の中に大勢の人たちへの思いがあるのが分かります」

「自分では考えたことはないけどね。今までに巡り逢った人のことはみんな好きだな。君の意識は、ほとんどの人たちを拒否しているね。でも、俺に対してだけは違う。俺のことを自分の内側全体に感じているね。こんなに直接に君の感じているのが分かるのは不思議な気分だな」

賢は右手で由美の肩を抱き寄せた。由美は賢に身体を寄せてじっと賢の目を見つめた。

「由美は過去世で何度か死んだだろう。その時のことは思い出せる？」

「死んだ時のことはよく覚えているわ。わたしは、この世で死ぬことを状態の変化としか感じないのよ。生きているときも死んだ後も意識は続いているから、他の人が感じるように死に望んで絶望的になるようなことはないのよ。自分の肉体が死を迎える時、意識が肉体から抜け出してゆくのが分かるわ。でも直ぐに又、それまで意識が入っていた肉体の姿形を作り出すのよ。だから、なんだか死んでいないような錯覚を覚えるわ。死んだばかりの時はまだこの世界のことが分かるのよ。全てが見えるの。でもこの世界の人からは、肉体から抜け出したわたしの姿は見えないようだわ。周りに居た人たちが、死んだわたしの肉体を取り囲んで嘆き悲しんでいるのが見えるもの。わたしは生きていて空中に浮いているのに。少しするとそこで新しく出来た身体からも抜け出すのね。この世界が見えなくなるわ。見えなくなっても暫くの間この世界に居るような意識が残っていて、自分でそのような世界を作り出しているようだけど、それもやがて無くなって丁度繭に籠もる蚕のように意識はじっと一

点に集中しているような状態になるのよ。もし意識が揺れるとその時の意識の状態に応じた世界が顕れるの。わたしから見ると、その世界に居る様な状態になるのよ。そして意識の乱れが収まるとまた、静止した状態になるの。静止状態で居る時に外側から何か干渉してくると、その繭から抜け出して動き出すような感じね。この世界に生まれて来るときも、何かの意志に促されるように繭から抜け出して自分に相応しい対象に向けて魂を注ぎ込むのよ。わたしは5000年前にあなたと分離して、初めてこの世界に一つの意識として生まれた時、随分苦しい世界を体験したようだわ。海を渡って来た異邦人の部族との間で戦いがあった、女もその戦いに加わったの。随分残酷な戦いが続いたのよ。そこで死んだ後は、暗く、寒く、汚い世界に居たことを覚えているわ。いわゆる地獄ね。でも、その地獄も自分を客観的に見て意識が全てを肯定する方向に切り替わってきたとき、次第に無くなっていったわ。地獄の悪魔のように見えた餓鬼や、阿修羅も本当は自分の意識が作り出した幻影だと気が付いたの。自分自身を苦しめる自分のことがとても可哀想になったわ。他人に対する憎しみが自分のエゴから発生していると分かった時、次第に暗さが消えて明るくなってきたの。そこにいた餓鬼や阿修羅は光が当たると薄れてゆく実体の無い陰だったことが分かったわ。でも、ふと敵の部族のことを思い出して怒りや憎しみの心が戻って来ると、直ぐに辺りが暗くなってきて、また阿修羅が姿を現して襲って来たわ。とても怖かった。地獄を作り出す感覚の中で恐怖心が一番影響するようね。恐怖を抱けば抱くほど、嫌悪する陰が実体のある姿になってゆくようだったわ。でもね、一つ前の生で、この世界に生まれた時はとても優しい男性と結婚できたの。わたしはそんなに酷い顔ではないでしょう。生まれてくる度に大体同じような姿形なのよ。そういう要素を持った肉体を選ぶのね。だから、心が閉ざしていても素晴らしい相手と連れ添うことができたのね。今では本当に感謝しているわ。前生では3人の子供にも恵まれたの。生活は楽だったし、苦しみと謂えば自分の心が何故か分からないけど塞がれていて、そう、今で謂う鬱病のような状態だったのね。誰も信じられなくなって、家族が自分を大切に思っているということ

を実感として理解できたのは死の床に伏せた時だったの。随分反省したわ。反省して涙を流したわ。そして、家族に感謝して死んだの。40歳になる前に死んだのよ。そしたら、死んだ後はとても明るい世界にいることが分かったわ……わたしの話していること、あなたにはよく分かるでしょう」

「うん、君が話す時、君の過去世が見える。君はいつも美人に生まれていたんだな。美しい由美の感情の起伏が伝わってくるよ。今の君もとてもきれいだけどね」

由美が賢の胸に顔を埋めたとき、部屋の電話が鳴った。賢は由美の肩に廻していた手を外して受話器を取った。由美の部屋に食事の用意が出来たという仲居からの連絡だった。ふたりは身繕いを糺して部屋を出ると、由美の部屋に入った。既に夕食の支度が調っていた。料理は向かい合った席に用意されていた。ふたりが席に着くと仲居が入って来た。

「お飲み物をどうなさいますか？」

「君、ビールで乾杯するか？」

「わたし、日本酒がいいわ」

「済みません、熱燗を2本お願いします」

「かしこまりました……それで、お床はどうなさいますか？別々のお部屋に？」

「いいえ、となりの部屋に二人分用意してください」

「かしこまりました」

仲居は微笑みながら応えると、暫くして熱燗と刺身を持って来た。由美は徳利の口を摘むようにして賢の杯になみなみと注いだ。賢も由美の杯に杓をした。

「君の帰還を祝して乾杯」

「あなたとの再会を祝して、」

ふたりは暫く差しつ差されつして食事を楽しんだ。徳利は5本にもなった。由美の頬はピンク色に染まり一層艶めかしくなっている。賢もほろ酔い加減になった。由美がトイレに立って戻って来た。部屋に入る時、足下がふらついて敷居に躓いてよろけた。自分の席に戻らず、ふら

ふらと賢の隣に座った。

「わたし、酔ったかしら。こんなにお酒を飲んだのは生まれて初めてのなのよ」

そう言うと、由美は賢に身体を寄せて凭れ掛かった。「はっ」と吐く由美の息が微かに賢の頬を撫でた。賢は由美の肩を引き寄せて右手を紅潮した由美の襟口に忍び込ませた。由美はそっと目を閉じた。賢の指先に熱くなった由美の乳房の柔らかな膨らみが喜びの高まりとなって感じられた。

「この身体はあなただけのものよ。やさしくしてあげてね」

賢は由美の唇を優しく吸った。二人は暫く抱き合っていたが、やがて賢は由美をそっと離して言った。

「俺の部屋に戻ろうか？」

賢はフロントに電話を掛けて食事が済んだことを告げた。賢は由美の肩を抱きながら部屋を出て自分の部屋に戻った。入り口をロックして部屋に入ると既に床が延べてあった。賢は30センチメートルほど離れて敷かれている床を引き寄せてぴたりと付けた。由美は酒の影響で早くなっている脈が一層速く打ってくるのを意識した。賢は由美を窓際の椅子に掛けさせ、横に退けてあるテーブルの上の2つの湯飲みに茶を入れて持って来た。それを小テーブルの上に置きながら、由美に向き合って座った。

「由美、少し酔ったね」

「ええ、あなたの酔いとわたしの酔いが一緒になって感じられるわ。まるで宙に浮いているような感じよ。いい気分」

「由美、ここの旅館に泊まったことはあるのか？」

「いいえ、わたしはいつももっと安い旅館に泊まっていたわ。そんなにお金も無いし、何度も来たから。だってあなたに巡り逢うことが目的だったんだから、旅館なんてどこでもよかったのよ。今日は違うわ。わたし5000年間待って今一番幸せな時を過ごしているんですもの、見るもの全てが美しく、優しく、素晴らしくて、大好きになっちゃったわ。今まで嫌いだったものまでがわたしに優しくしてくれているようで、嬉

しくて、嬉しくて。みんな好きになりそうだわ」

「静かな旅館だな。外は寒いのにここは暖かい」

そう言いながら賢は茶を啜った。窓の外は暗闇で川も山肌も見えない。ふたりは暫く外を眺めていた。じっと見つめていると、いつしか白い雪がはらりと落ちて来て消えた。またはらりと落ちて来る。やがて雪ははっきり見えるほど降り始めた。

「雪よ、とってもきれい。お部屋の中はこんなに暖かいのに」

賢は静かに立ち上がると部屋の入り口に行き、襖を閉めて部屋の灯りを消した。部屋は一気に冬の雰囲気変わった。壁際に取り付けてある間接照明が床の間に生けた一輪の寒椿の花を浮かび上がらせている。艶やかな赤が雪の影を映して、薄暗い部屋にほんのり暖かさを醸し出している。賢は窓際に戻って由美の手を引くと、静かに立ち上がらせた。由美は立ち上がり際（きわ）によろけるように賢に身を凭れ掛けた。賢は由美を静かに受け止め、ふたりは強く抱き合った。少し曇っている窓ガラスに抱き合ったふたりの姿が映っている。外の雪がふたりを包んでいるようだった。由美は賢の腕の中で肩越しに白い色の乱舞を弄んだ。賢が由美の手を引いて床の上に座った。由美はやや恥じらいを感じて賢から少し離れ、半身に向き合って座った。

「由美」

ほんの少し自分の方に身体を寄せた由美に膝すりして近づくと、賢は由美の背後から肩を抱いた。由美は身体を震わせた。賢は由美の袖口から両手をいれて、二つの乳房を握った。由美は頭を仰げ反らせて、は一つと息を吐いた。由美の小さな乳首が硬くなっているのが賢には感じられた。

「由美、俺の感覚を感じられるか？」

「う、ん。胸が・・・とっても・・・柔らかいわ・・・可愛くて・・・好きよ」

「何となく感覚を超えた喜びが身体全体に広がってゆくを感じる。これ、今までに体験したことのない感覚だ」

「わたしも同じよ。ああ・・・永遠にこのままでいたい・・・もう二度

と離れたくないわ」

「由美、おれの高まりは感じるか？」

「意識の高まりは感じるわ・・・身体の高まりは分からないけど。でも、自分の身体が興奮しているのは・・・感じるわ」

賢は由美の浴衣を肩から外した。由美の姿が薄暗がりの中に浮き上がった。賢は由美を仰向けに横たえた。

「\*\*\*\*\*」

由美は恍惚として虚ろになった目を半分開いて賢の目を見つめている。

「強く抱いていて・・・動かないでいて・・・わたしから離れないで」  
由美は目を瞑っている。賢は思考を止めて意識を由美に集中した。意識の中に一つの光の玉が見える。それが自分だと分かった。遠くにもう一つの光の玉が動いている。その光の玉が次第に強く輝きながら近づいて来る。光の玉が自分の光の玉に向かって来るのが分かった。光の玉が自分の光の玉の中に入り込んだとき、大きな光の波が生じ、由美が「あぁーっ」と叫んだ。そして由美の力がすーっと抜けたように思えた。賢は由美が気を失ったのかと思った。賢が由美から静かに出ようとする、賢の背中に廻っていた由美の手に力が籠ってきて動けない。由美は止めていた息を一気に吐き出すと、賢の身体の下で激しく呼吸をし始めた。

「由美、どうした」

由美の瞳から一滴の涙が流れ出た。

「やっと、あなたの中に入れたわ。朝までこのままでいて」

賢は無言で由美を抱きしめた。ふたりの身体は直ぐに眠りに落ちたが、意識は朝まで醒めていた。朝、目を開けると由美は既に目を開いていた。ふたりは向き合って横になっている。もう、結び付いてはいなかった。

「由美、起きていたのか？」

「今起きたの。あなたと一緒によ」

賢は由美の額に口づけをすると、掛け布団を撥ね退けて起き上がった。由美は部屋に入ってくる朝の光の下に顛わになった自分の裸に初めて気付いたように、恥ずかしそうに賢に背を向けた。ふたりは洗面道具を手にして部屋を出た。賢は由美が自分の部屋に戻って、着替えを手にし

て出て来るのを待った。由美が戻って来ると二人は連れ添って浴室に向かった。浴室には既に数人の人達が居た。皆、無口に鏡に向かって顔を洗ったり口を漱いだりしている。由美は湯を浴びると直ぐに湯船に浸かった。目を閉じ、賢のことを思った。身体の中から込み上げて来る熱い感情に胸が打ち震えた。ふと見ると、周りに居るのが皆男性であることに気付いた。慌てて胸を押さえながら目を開けると、湯船の中には自分ともう一人の女性が居るだけだった。

「あの方の感覚が分かるのかしら」

由美は再び目を閉じてみたが、今度は男性浴室にいるという感覚は無くなっていた。

賢も由美と同じような経験をした。湯船に浸かると直ぐに目を閉じて昨夜からの行動を省察した。意識を由美に向けると、洗い場に4、5人の女性が並んで、黙々と顔を洗ったり、歯を磨いたりしている。丁度湯船から眺めているような感じがした。身体は寛いで足を伸ばしているような感覚を覚えた。突然顔に湯を浴びたような感覚が走った。湯の滴が掛かったようだ。湯船に小さな女兒が飛び込んだのだ。女兒は由美と反対側の湯船の端で微笑んでいる30歳前後の女性に向かって手足をバタバタさせて泳ぎの真似をしている。賢は意識を自分の指先に戻し目を開けた。湯船には4人の、4、50歳代の男性達が、夫々に檜の縁(へり)にもたれ掛かって放心したように湯に浸かっている。女兒の姿は無い。やはりここは男湯の湯船だ。賢は自分の意識が由美に向くと、由美の感覚を共有することを知った。どうして由美との間にだけ透視のようなことができるのか不思議だった。祐子や亜希子とも同じような体験をしているのに、彼女たちに意識を集中させても透視のようなことは起きたことがない。賢はふと変わったことに気付いた。ただ単に由美の目にしたものが自分の意識に映るのではなく、そのビジョンを通して、由美が感じた感覚も伝わって来るらしいのだ。女兒が湯船に飛び込んだ時、由美が感じた驚きの感情が鋭く伝わって来た。賢は暫くの間省察と瞑想を行ってから湯船から上がり、身体を洗って浴室を出た。賢は暖簾の外に置いてある籐の椅子に腰掛けて由美を待った。10分ほどして由美が出て

来た。

「お待たせしてしまったかしら」

「いや、そんなに待っていないよ。由美、君のこと透視できたぞ。女の子が湯船に飛び込んだだろう、その時の驚いた感情がこっちにも伝わって来たぞ」

「わたしも、あなたのことよく分かったわ。あなたの目を通して浴室の中を見ているような感覚がしたわ。初めは一寸恥ずかしかったけど。以前、あなたのことを透視できたのは、あなたの意識が現実界から離れている時だったでしょう。でも今度は違うわ。あなたが普通にしている時にもあなたの意識が伝わって来るのよ。素晴らしいわ。わたしたちは本当に一つになっているようだよ」

賢は自分の部屋に戻ると帰り支度を始めた。荷物の整理を済ませると窓際に寄り立った。外はすっかり明るくなって山肌がくっきり浮き上がって見える。祐子と泊まった時の感覚が蘇ってきた。由美はまるで祐子を写したような女性だった。姿形がよく似ていた。祐子と違っているところと言えば、由美の体が痩せ気味なことと明るさだけだ。祐子は陽で由美には陰を感じた。

由美も部屋に入ると手際よく帰り支度を整えた。昨日賢に買ってもらった朱色のコートが外から入って来る光の下で見ると緋色に輝いているようだった。荷物をまとめてクローゼットの前に置くと、由美は賢の部屋に行った。賢はノートを開いて書き込みをしていた。

「何書いているの？」

「君のことさ。まだまだ分からないことが一杯あるな」

ふたりは朝食を摂る為に二階の大広間に降りた。食事は既に準備されていて、「内観様」と書いてある札が置いてあるテーブルに二人分の食事が用意されていた。ふたりは椅子に腰を降ろした。ふたりを見て仲居が近付いて来た。

「おはようございます。こちらのお席でよろしかったでしょうか？」

「はい、結構です。よろしく願い致します」

「ただ今、お茶とお味噌汁をお持ち致します。御飯はこのお櫃に入って



ございます。奥様、よろしくお願ひ致します」

由美は自分が奥様と呼ばれたことに全く違和感を覚えなかった。

「分かりました」

そう言うのと由美は中腰になって賢の茶碗を取り、御飯をよそって賢に渡した。賢が微笑みを返すと、少し賢の目を見つめていて、おもむろに腰を下ろし自分の分としてほんの少し茶碗に盛ってテーブルに置いた。ふたりは3組のグループとほぼ同時に食事を始めた。食事をしながら由美の肩越しに一人の男性の視線を強く感じた。その男は男性ばかりの4人のグループの中の一人の様だった。その男の前の席にいる年配の男性の話し掛けにその男が応えたのか賢に注がれていた視線が逸れた。賢は意識を由美に戻した。

「どなたなの？」

由美は自分の後方にいる男を賢の目を通して見ていた。

「分からない。会ったことのない人だ。君は分からないか？」

「わたしも分かりません」

「そう・・・ところで、今日は先ず伊豆市の警察に届け出よう。それからカメラマンが来る前に東京に戻ろう。最近失踪事件が次々に解決してゆくのメディアが躍起になって追い掛けているんだ。幸い俺はまだその標的になっていないけど、君はいずれどこかの放送局に呼ばれてライブでインタビューを受けるなんてことにもなり兼ねない。そのつもりでいた方がいい。東京に戻っても会社に復帰できるかどうかは疑問だな。だけど自分の家があるんだから住むところは心配ないな。俺のアパートの住所と電話番号を書いておいたから困ったときはいつでも連絡しろよ」

「はい。でも、わたしの意識はあなたに通じていますから、わたしが窮地に陥るようなことがあっても、あなたには直ぐに分かっていただけると思います」

ふたりが食事を済まして部屋に戻ろうと立ち上がると、先ほど賢を凝視していた男のグループも同時に席を立った。賢と由美は特に意識せず大広間を後にした。エレベータの前まで来て昇りのボタンを押した時、

先ほどの男達もエレベータの乗り場にやって来た。賢を凝視していた男が賢に向かって頭を下げた。賢も軽く頭を下げて応じた。仲間の内の一人が下りのボタンを押した。

「永代にお住まいの内観さんではありませんか？」

賢はこの男が自分のことを知っていることに驚きながら応えた。

「はい、内観ですが。どうしてわたくしのことをご存じで？」

「わたくしは東領製作所の山内です。この度あなたと一緒に仕事をさせていただくことになりました。先日社長からあなたの紹介がありました。そしてプロジェクトの仲間からあなたが今日河合楼にご宿泊になっていると伺いまして直感的にあなたに相違ないと思いました」

「そうでしたか。わたしは1月1日付で貴社に採用されることになっています。その節はよろしくお願ひ致します。今日は仕事で参られたのですか？」

「いいえ、昔の級友と恒例の一泊旅行に来たのです。ここはなかなかよいところですね」

上りの自照ボタンが点滅してからすぐエレベータの扉が開いた。賢と由美は軽く頭を下げてエレベータに乗った。山内は丁寧に頭を下げて扉が閉まるのを待った。まるで、賓客を見送る時の様に丁寧な辞儀であった。

「エレベータに乗るほどでもないのに」と思いながらふたりは降りた。

「今度、東領製作所に勤めることになったんだ。あの人はどうやらあの会社の人みたいだな」

「今失業中だったの？」

「うん、会社を辞めて暫くの間失踪事件を調べていたんだ。君には話さなかったが、君が失踪してから立て続けに6件の失踪事件が発生したんだ。それらを調べていたんだが、調査中に鹿児島で自分自身が失踪してしまったんだ。その時俺と一緒に失踪した女性の父親が、俺を自分の経営している会社に雇ってくれることになったんだ。残金もそろそろ底を突いて来ていたから、砂浜に打ち上げられた魚が打ち寄せてきた波で水を得た心境さ」

「そうだったんですか？先ほど1月1日とおっしゃっていましたね。も

う、あまり時間が無いではないですか？」

「そうなんだ。実はこの調査旅行が失踪事件を調べる為の最後の旅行になるかも知れないと思っていたんだ。君が戻ってくれて本当に良かったと思う」

「本当にありがとうございます。わたしは5000年の眠りから醒めた白雪姫の心境です」

ふたりは一旦自分の部屋に戻ってから。荷物を手にして出て来た。由美は朱色のコートに身を包んでいる。顔は喜びに満ちていた。ふたりはエレベータで1階に降りた。賢がチェックアウトカウンターで支払いをしていると、先ほどの山内の中間の一人がやはりチェックアウトする為に、賢の後に並んだ。仲間から離れた山内が由美に近づいて頭を下げた。由美は黙って頭を下げた。

「先ほどは、ご挨拶申し上げることができませんでしたが。東領製作所の山内です。よろしくお願い致します」

由美は何も言わずにただ頭を下げ、視線を山内から外して賢の方に向けた。山内は直ぐに身を交わされてどぎまぎしたが、それ以上話し掛けることができないのか結局諦めたように仲間達の処に戻って行った。チェックアウトを済ますとふたりは交番まで歩いて行くことにした。フロントの女性が言った10分程度という声が耳に残っている。下田街道を修善寺方向に800メートルほど行った所に大仁警察署管轄の天城湯ヶ島交番があった。交番には警察官がひとり事務を執っていた。地元の老人がカウンター越しに警察官に話し掛けている。賢達が交番に入ると、老人は「そんじゃ、あとでまた来るで」と言ってそそくさと出て行った。

「おはようございます。どうなさいましたか？」

警察官は50歳前後の丸顔の温厚な感じの男性だった。賢が口を切った。

「おはようございます。実は、この方は今年の夏に浄蓮の滝で消息を絶って行方知れずになっていた早瀬由美さんですが、昨日奇跡的に帰還致しましたので報告に来ました」

「えっ？今、何と言いましたか？」

由美がそれを受けて説明した。

「わたしは昨年の夏、浄蓮の滝で行方不明になった早瀬由美です。昨日こちらにいらっしゃる内観さんに助け出されて、戻って来ることが出来ました」

「は、はい、今、調書を用意しますので、そちらにお掛けになってください」

警察官は慌てて机の引き出しから事情聴取の報告書を取り出すと、ふたりに確認しながら1項目ずつ記入していった。「どのようにして帰還したのですか」という質問に由美は、

「よく分かりませんが、この方に呼ばれて意識が戻ったときは浄蓮の滝の滝壺の近くにいました」

とだけ応えた。5000年待ったということは口にしなかった。警察官は少し怪訝な顔をしたが、そのことについてはそれ以上詳しく質問をすることはなかった。由美の言葉をそのまま記録しただけだった。およそ、1時間ほどで報告は完了した。警察官は直ぐに本署の大仁警察署に連絡をとるので、待っていてほしいと言ったが、賢は由美が疲れているので失礼したいと断って交番を出た。ふたりはこの事件の結末に関することは一応報告し尽くしたと確信していた。警察官は何か落ち度がないか何度も調書を見直していたが、ふたりが交番を出る時に「後で連絡を取らせてもらうことになると思います」と言った。ふたりは近くのバス停まで歩いた。賢は由美が危なくないように由美の右手を握って自分が道路側を歩いた。この日は朝から日差しが暖かく、昨夜の雪空とは打って変わって小春日和を感じさせた。それでも朝の風は冷たく、由美はコートの温もりに喜びを覚えた。414と番号を付けられた下田街道は、修善寺から直接下田に抜ける自動車道であり、それなりの交通量があった。二人がバス停まで歩いて行くと、前から5、6台の乗用車が疾駆して来て通り過ぎて行った。直ぐに後方から1台の赤い車が、猛スピードで接近して来て、腕をぶつけられるのではないかと心配になるほど賢に接近して通り抜けた。由美が、車が通り抜ける直前に賢の手を取って引き寄せた。賢は由美と顔を見合わせた。

「ありがとう」

「あぶないわ、ここは歩きにくいわ」

交番から100メートルほど行くとバス停があった。修善寺行きのバスは直ぐに来た。バスには観光客と思われる高齢の男女が6、7人と地元の20歳前後の女性3人が乗っていた。ふたりは昨日と同じようにふたり掛けの座席に並んで座った。

「手続きはこれだけでいいのかしら？」

「いいんじゃないかな。あの交番の警察官が、「本署に行ってくれ」なんて言い出さなくてよかった」

午後2時を少し廻った頃ふたりは東京駅に着いた。

「何だか不思議な感じがするわ。わたし、1年間ここに来ていなかったのね。つい数日前まで来ていたような気がして来るわ。朝のラッシュアワーの時は大変なのよ。毎日東京駅の構内を通っていた訳じゃないけど、丸ノ内線の東京駅で降りていたのよ。そこから新丸ビルの右を通過って、そう日経ビルの手前を右に折れて行くのよ。朝は随分大勢の人たちが歩いているわ」

「みんな意識的に生きているのかな？」

「答えは多分ノーね。朝は特に酷いわよ。前日の疲れと蓄積した仕事の疲労感で、湯ヶ島にいた人たちのように生きた目をしている人はほとんどいないわ。可哀想になる時もあったわ」

「なぜなんだろうな」

「分からないわ。東京に居る人たちの意識がほとんど政治、経済、物質に向いているから、集合意識として効率至上主義的な形で人々自体にも作用しているんじゃないかしら。やすらぎが無いのね」

「自然の意識を喪失しているのかな」

「まあ、そう言っているのかも知れないわ。でも思考は頻繁に巡らせていて、どうやって安楽な生活を得ようかとばかり考えているのよ。時価数億円もするマンションを購入した人なんかは、もうそれで自分が偉くなったような、天国にでも居るような、これ以上の生活はないような錯覚に陥るのよ。一寸哀れね。一流と云われるコックが作った料理を一流

という看板を出しているレストランで食べて、一等地に立っているマンションの一室に戻り、一流と呼ばれる会社の作ったベッドで横になると、自分が最上級の人生を生きているような錯覚を起こすのね。それが全てといったような。ほとんどの人がそうよ。うまく操って得たお金で、最高級と謂われるものを買々と、自分が他の人より優れているかのような錯覚を起こすのよ。以前降霊会の人と一緒に大勢の人の意識に触れてみようということ夜桜を見物に芝公園に行ったことがあるんだけど、その時、一つのグループがテーブルと椅子を置いて場所を陣取っていたわ。そのテーブルに布のテーブルクロスを掛けて、そこに高価なモーゼルワインを用意して、レストランのコックを呼んで料理させて晚餐会を開いていたわ。お花見によ。馬鹿みたい」

「随分、東京の人たちに対して厳しい見方をしているね」

「それは、あくまで一つの典型例で言っているだけで、皆が皆そうだとは言わないけど。大方がそっちの方向を向いているわね」

「だけど由美、人間が生きる目的は、君も知っているように自分の目を通してより多くのことを体験し、認識することにあるんじゃないかな。だから、人間の作った虚構の世界を体験して認識するのも一つの人生かも知れないよ」

「でも、それだけの体験なら一生を懸ける必要はないわ。1年かそこらの経験で十分分かるわ」

「君ならね。だけど人によっては、そういうものが取るに足らないことだと分かるのに、何千年も掛かる者もいるんだよ。可哀想だけどね。それに、そうだと分かったとしてもそこから抜け出すだけの勇気と行動力が無い場合も多いしね。大抵の人は潜在的な不安が原因で現在の状態から離れられないんだよ」

ふたりは東京駅で別れた。由美は一度会社まで行ってから自宅に戻ると言った。賢は祐子と亜希子に会って今度の調査の進捗状況を話したかった。二人とも賢の調査結果を首を長くして待っているはずだった。由美と分かれて賢は直ぐに祐子の携帯に電話を掛けた。祐子は呼び出し音が鳴るかならない内に出た。

「待っていたのよ。結果はどうだった？」

「今、東京駅に居るんだけど、亜希子と一緒に出て来れないか？」

「亜希子さんは琴の稽古で出ているのよ。わたし直ぐに行くわ」

「渋谷のハチ公のところに来いよ。時間的に丁度いいだろう」

「うん、直ぐ行く」

祐子は賢より少し前にハチ公前に着いた。相変わらず目が眩むほど沢山の人が蠢いている。祐子は賢に直ぐに見つかるように銅像の正面に立った。日差しは明るく、祐子が身に着けている輝くようにまぶしい純白のコートの襟の間から、黄色のワンピースが僅かにのぞいている。周囲の黒ずんだ色の衣服の中で祐子が浮き上がって見えた。賢は直ぐに気付いた。

「祐子、おまえ白が似合うな。特に明るい日差しの下では凄く眩しく感じる。目を開いていられないほどだ」

「ありがとう。久しぶりにその言葉を聞いたわ。食事は済んだの？」

「うん、駅弁を食べた。どこかコーヒーショップに入ろうか？」

「近くに、洒落たティーハウスがあるわ」

ふたりが入ったのは路地の入り口にあるコーヒーハウスだった。ふたりは一番奥の席に着いた。店内は半数ほどのテーブルが先客で埋まっていたが、出来るだけ奥の席に座りたいとふたりは思った。幸い一番奥のテーブルが空いていた。席に着いて、賢が店員にコーヒーを頼むとコートを脱ぎながら祐子が言った。

「どうだった？成果あったの？」

「どうだったと思う？」

「難しかったんじゃない？だって由美さんって一寸変わっているでしょう。降霊やら物質化現象やら、何か胡散臭いものを感じるわ。だけど、あなたがこうして戻って来たってことは、多分大丈夫だったのね」

「その通り。由美さん帰還できたよ。彼女はそんなに変わった人でもなかったよ。今東京駅で別れて来たばかりだ。彼女はこれからが大変だよな」

「本当なの？流石にあなたね」

「案外簡単に帰還したんだぜ。由美さんは俺のことをずっと待ち続けていたようなんだ。今世だけじゃなくて何世にも渡ってな。失踪した浄蓮の滝の滝壺付近に意図して意識を置いて俺を待っていたらしい」

「えっ？ どういうこと？」

「何とか俺に会おうと何度も生まれ変わって俺のことを探し廻っていたようだ」

「あなた、そんな言葉を信じるの？・・・で、どんな風に帰還できたの？」

「それが凄いことが分かったんだ。彼女、失踪中も意識を働かせていることができたんだって。しかも帰還後にもその記憶を持っているんだ。一つの前提が崩れてしまったよ。おれは失踪中は時間が止まり、空間も無くなっていると思っていたんだが、彼女に言わせると時間経過は感じないけど自分の意識に通じる変化は感じ取ることができるらしい。それを記憶に残せるか否かは、特殊な能力によるのかも知れない。彼女はあそこで俺の意識に同調しようとして俺を待っていたらしい。同調できた時に俺の居る方の場、つまり現象界に意識を移して自分を実体化したようだ」

「特殊な能力ってどんな能力なの？」

「うん、彼女は俺が他の失踪者に対して意識を集中しているときのことを認識していたと言っている。凄いことだと思わないか？」

「由美さん、どうしてあなたのことを探していたのかしら？」

「彼女に言わせると、俺と彼女は5000年前に分離した一つの存在だったってことだ」

「そんなこと、どうして分かるのかしら？」

祐子は少し不愉快そうな顔になってきた。

「俺は過去世で彼女と出会っていたらしいんだが、彼女はその時のことを思い出すことができるようだ。過去世では、何回かの生まれ変わりの間自分が俺の存在を探していることに気付いていなかったようだが、一つ前の前世でそれが分かって、今世生まれる前に俺の誕生の少し後に生まれることを計画したようだ。もっともこれは彼女の説明を真に受けて



の話だけだな」

「わたしは、そんなこと信じないわ。一寸癩だわね。過去世をリーディングできるなんて。わたしにはそういう能力がないからいつも齒痒いわ」

「だけど、おれは由美さんに会っても、祐子に初めて会った時のような魂の高揚感は無かったんだ。彼女の言ったことを確かめる為に、何とか自分の過去世をリーディングする能力を身に付けてみたいと思っている」

「本当に、そんなことできるようになるのかしら？もっとも、あなたならできるかも知れないけど」

賢がコーヒーを手にしようとしたとき、突然激しい爆発音と同時に地響きがし、賢達の座っている席の奥の壁にある二つの窓ガラスが割れて、破片が窓際のテーブルの上に散らばった。賢と祐子は咄嗟に身体を折って両手で頭を抱え込んだ。幸い窓際のテーブル席には客は居なかった。店内の客はそれぞれ自分の身を守る体勢を作った。あるものはテーブルの下に身を隠し、あるものは床に伏せる姿勢をとった。爆発音は1度だけだったが誰も彼も暫くの間じっと動かずに居た。賢が顔を上げると割れたガラス窓の向こうに一瞬火柱が見え、やがて噴煙が辺り一面充満して来るのが見えた。どうやら爆発が起きたらしい。

「祐子！怪我はなかったか？」

「大丈夫！あなたは？」

「おれは大丈夫だ。店の中の人たちは大丈夫だったのだろうか？」

賢は辺りを見回したが、倒れたり怪我をしている人はいないようだった。店内の客はやおら立ち上がり、安全を確かめてから皆先を争って外に飛び出して行った。入り口の扉はアルミ製の1枚板だったので、破壊を免れていた。店員はただ呆然としてうろたえている。賢は祐子に近寄り怪我の無いのを確認してから肩を抱いて店の外に出た。外は黒い煙がもうもうと立ち込めていて、どこで爆発が起きたのか見当も付かない。警察官が拡声器を使って野次馬に近付かないように注意を促している。どうやら斜め向かいのレストランで爆発が起きたようだった。そのレストランは2階以上が事務所になっている7階建てのビルの1階にあった。5

つほどある窓のガラスは全て粉々に吹き飛んでいる。警察官もまだ警戒して中に踏み込んでいないようだった。賢は祐子を安全な場所まで連れて行くと、自分は急いで爆発したレストランに向かって走った。警察官が後方から大声で怒鳴っていたがそれを無視してレストランの中に飛び込むと、中は瓦礫の山で、咄嗟に爆発が入り口付近で起きたことが分かった。煙が燻っていて火薬のような臭いが充満している。テーブルはことごとく吹き飛んだり、倒れたりしている。天井から下がっていたと思われるライトが吹き飛ばされて床に散らばっている。入り口付近は壁も燃えてしまっていて、天井が崩れて石膏ボードが垂れ下がりコンクリートの地肌が出ている。幸い火は既に消えていた。賢は辺りを見回した。

「誰か居ますか？」

奥の方から呻き声が聞こえてきた。賢は焼け焦げて足が折れ、倒れているテーブルの板の下敷きになって、蹲（うずくま）っているひとりの青年を抱き起こした。青年は首筋から血を流しており、左手の袖口も血で染まっている。賢が声を掛けると大きく目を見開いて言った。

「な、何が・・・起きたのでしょうか？」

「爆発です。立てますか？」

「はい、なんとか」

「僕の肩に捕まってください。あなたの他に誰か居ましたか？」

「カップルが一組居ました。入り口付近の席でしたが」

賢が青年の脇を抱えて立ち上がらせて入り口まで連れて行くと、丁度救急救護隊が駆け付けて来たところだった。10人ほどの救護班と数人の警察官が近付いて来たが、怪我人を抱えて来た賢の姿を見ると一斉に入り口から中に入り、瓦礫を取り除きながら倒れている人を探し始めた。警察官は爆発の起きたと思われる付近を中心に調べた。賢は青年をひとりの救護隊員に引き渡すと再び中に戻った。店員と思われる二人の女性とひとりの中年男性のコックが奥の厨房から連れ出された。男性は手に火傷を負っているようだったが、自分で歩いて出て来た。その後で二人の女性が救出された。一人は中年の女性で外傷は見当たらないようだったが意識が無い。もう一人の女性は頭部から血を流していて、ぐったり

しているが、意識はあるようだった。二人とも担架に乗せられて、急いで運び出された。救護隊は必死になって残りの生存者を捜した。入り口を入った突き当たりに積み重なるように吹き飛んで来たと思われる2、3のテーブルと崩れて落ちた天井の石膏ボードや装飾品の瓦礫が積み重なっている場所がある。救護班の男達はその部分を捜索し始めた。賢と2人の救護隊員が瓦礫を横に除けて2つのテーブルの残骸を取り除くと、そこに一組の男女が折り重なったように倒れていた。女性は白いセーターを着ていたが、直接爆発時の火を受けたようで背中部分の部分が少し黒ずんでいる。救護隊員達が一斉に集まって来て、必死に瓦礫を取り除いていった。救護隊の一人が首を横に振った。

「だめだ、二人とも首の骨が折れている。男性が女性を庇おうとしたようだが間に合わなかったようだ」

二人の遺体が運び出された。賢は目から涙が流れるのを感じた。それから暫く辺りを探したが救護隊のひとりが「もう中には誰も居ないようだ」と言った。賢が外に出ると、辺りは黒山の人だかりになっていた。既に警察官によって立ち入り禁止のロープが張り巡らされ、ビルの事務所から出た人達も一団となってロープの外に待機させられていた。バリケードと拳銃を手にした警察官がロープの内側で待機している。賢は説明する間も与えられず、二人の警察官に取り押さえられ、手錠を掛けられてパトカーで渋谷警察署まで連行された。賢は無抵抗で従った。どうやら爆発実行犯の容疑を掛けられたようで、直ぐに事情聴取を受けた。祐子は急いでレストランに戻り、ウエイトレスに頼んで一緒に渋谷警察署に任意同行した。祐子の機転によって賢の容疑は直ぐに晴れた。取り調べを行った警察官が何度も詫びを言い、救護活動を行ったことに対して感謝状を贈りたいとまで言い出したが、賢は「当たり前のことをしたまでです」と言って断った。警察官の話では、どうやら過激派による爆破の可能性が高いとのことだった。爆発の少し前にレストランから出て行った客がいたとのことだった。意識を取り戻した店員のひとりが、彼が黒い鞆を持って入って来たのを覚えていた。「あるビルを探している」と言って尋ねられたと証言した。その男は鼻の下と顎に髭を生やしていて、

鬢長も伸ばしていたのではっきり店員の記憶に残っていた。警察はその男の行方を追い始めた。賢と祐子は警察署を出て賢のアパートに向かった。ふたりは爆発のことは口にしなかった。口にしたくなかったと言った方が正しいかも知れない。アパートに着くと賢は直ぐにシャワーを浴びて、衣類を着替えた。顔や手に滲み込んだ火薬の様な匂いと黒い煤の汚れを落とすと次第に気持ちが晴れてきた。賢がタオルで頭を拭きながら部屋に戻って来ると、待ち構えていた祐子が抱きついた。

「あなたが無事でよかった」

「亡くなったのは俺たちと同じようなペアだ。随分酷いことをするものだ」